

タイトル	明治後期北海道移住者の足跡：八雲町茂木農場をとりあげて
著者	仙波，千枝；SEMBA, Chie
引用	北海学園大学人文論集(62)：270(四七)-221(九六)
発行日	2017-03-31

明治後期北海道移住者の足跡——八雲町茂木農場をとりあげて

仙波 千枝

序 章

明治三七年に北海道胆振国山越郡八雲村大字八雲字ペンケルペシユペ原野（現北海道二海郡八雲町鉛川）の国有未開地に開設され、明治三九年にかけて移住が行われた農場は、「茂木農場」とよばれた。埼玉県児玉郡本泉村の茂木清兵衛が貸付・付与を受け、同県秩父郡小鹿野町の茂木寛吾が初代農場監督人を務めた同農場は、「茂木」氏の農場であった期間は一〇年余りであるが、現在でも八雲町で「茂木農場」と言えば、木彫り熊の制作者を以て記憶に残る農場となっている。また大正八年一月二八日大日本帝国陸地測量部発行・昭和二年一月三〇日内務省地理調査所発行の五万分の一地形図「遊樂部岳」にも「茂木農場」は記載されている。なお北海道庁編・発行『北海道農場調査』（大正二年）には、茂木農場の記載はない。

『殖民公報』第五一号（明治四二年一月一七日）は、明治三〇年代における北海道移住熱の要因を次のように解説している。府県の凶作に日清戦後の雄飛熱が加わり明治三〇・三一年に北海道移住者が急増し（明治二九年五九七〇名、三〇年三二五二六名、三一年三二八三二名）、明治三一年の道内各地における水害と府県の豊作により翌三二年の移住者

は三九五名と激減したものの、その後漸増した。そして奥羽地方の凶作に比する北海道の豊作、日露戦争による事業の緊縮・増税等の影響を受け日露戦争中北海道移住者数は増加の一途をたどり、戦後も戦争終結による雄飛熱が加わり移住者数は増加を見せていたのである(明治三六年一〇九三七名、三七年一八四二五名、三八年二六四〇六名、三九年五五一八〇名、四〇年八三〇六二名)。茂木農場の人々は、このような中で新天地を目指したのであった。

八雲村は、明治一年に旧尾張藩士が遊楽部原野に入植し徳川家開墾試験場を開設したことで知られているが、移住地としての知名度は決して高くなかった。明治二〇年代に刊行された北海道移住の手引書にはほとんど記述がなく、君塚順之助著・発行『北海道移住之心得』(明治二九年)に挙げられた「殖民地撰定国別表」(明治一九・二三年調査)では、胆振の耕作適地・牧畜適地は後志を除き他地域と比べて桁違いに少ない。⁽¹⁾加藤房蔵『北海道地理』(大倉書店 白鳥書店 明治二六年)においても「八雲村ハ山越郡ニ属シ旧尾州藩士ノ移住スル所ナリ」と簡潔に触れられているに過ぎず、松原岩五郎『日本名勝地誌』第九編北海道之部(博文館 明治三九年)の目次に挙げられている「蝦夷の山づと」は『太陽』第五巻第一号(明治三二年一月一日)に掲載された後志・胆振各地の見聞記であるが、八雲村に関する記述はない。

また明治二四年三月に北海道庁より刊行された『北海道殖民地撰定報文』にも記述はないが、明治三〇年四月刊行の同第二報文においては、「山越郡遊楽部原野」について次のように記されている。

山麓エ溪深く其広袤従テ狭ク地味亦粗悪トナル雖レトモ此地ハ八雲村ニ接続スルヲ以テ将来必ス耕地トナルヘキハ疑ヲ容レサル所ナリ遊楽部川沿岸ハ川流ノ紆余スル処及支流ノ合スル処平坦ニシテ草木繁茂シ其地味頗ル肥沃ナリト雖地積甚タ広カラス⁽³⁾

土地が狭く地味に乏しいが八雲村の市街地に近接している便宜と、遊楽部川沿岸は狭いが地味が肥沃な地域もあることが挙げられている。しかしながら移住地としての魅力に満ちているとはいえない。また北海道庁編『移住者成績調査』

（北海道協会 明治三十九年）においても、団体移住者として挙げられている八雲村の移住者はなく、個人としても徳川家開墾地に藍作の指導者として移住し明治二二年七月にビンニラに土地の貸付を受け三二年に付与された八木周市が取り上げられているのみで、刊行物を見る限り八雲村は移住の適地であるとのイメージを与える地域ではなかったであつた。

しかしながら、八雲村は明治末期から大正初期にかけて岩手・相馬・福島・福井・越後・静岡・加賀などから団体移住者を多く迎えているのである。埼玉県からの移住者により開設された茂木農場はこの中の一つで、茂木農場は八雲村への移住がさかんであつた時期に開設された農場であると位置づけることができる。

本稿は、茂木農場の開設とその後の経緯を追うことを通し、明治後期から戦前期における北海道移住者のあり様を明らかにしようとするものである。茂木農場については、大島日出生「茂木農場と中里大蔵少年」（『ゆうらふ』第三号 昭和四四年二月一日）に聞き取り調査の記録が残されている。

なお本稿では、人名を名前・敬称略で記述することを予めお断りしておく。また出典が示されていない内容は、茂木農場関係者及びその他の方々への聞き取り調査によるものである。

注

- （1） 君塚順之助『北海道移住之心得』 君塚順之助 明治二九年 二頁
- （2） 加藤房蔵『北海道地理』 大倉書店・白鳥書店 明治二六年 三一〇頁
- （3） 北海道庁編『北海道殖民地撰定第二報文』 北海道庁 明治三〇年 五三頁

第一章 八雲へ

第一節 茂木農場開設とその背景

茂木清兵衛は、明治三十七年九月二十四日に国有未開地の貸付を申請し、同年一〇月一五日に指令第四三三八号を以て貸付が許可された。『国有未開地処分法完結文書 区画地貸付台帳』（以下『貸付台帳』 北海道立文書館所蔵）によると、貸付を受けたのは「胆振国山越郡八雲村大字八雲村ペンケルペシエペ原野三線自三、至十、十一甲乙自十五、至十六、四線三、五、七、自九、至十六番」で、ペンケルペシユベ川と鉛川の間位置する高台三一万五一五〇坪（約一〇四ヘクタール）であった。近隣の貸付地の中では、広い部類に入る。「目的地目」欄には「畑」と記入されている。

茂木農場一帯は丘陵地帯であるため、移住者は一定の広さを持つ区画を階段状に切り開いた。当時の農場の面影を現在も見ることができる。遊楽部川沿いの道を進むと、旧鉛川小学校の前に山の方に入る一本の坂道があり、その坂を上ると道の両側に階段状に開かれた区画がいくつか確認できる。そこが旧茂木農場である。

まず左側に、入り口の大きなおんこの木が印象的な区画が目に入る。ここには二階建ての農場事務所が建設され、茂木寛吾一家が住んだ。埼玉県児玉郡本泉村から移住した中里大蔵は、この事務所を「なかなか豪華なものであった」と回想している。この事務所は後に沖田製作所（八雲警察署通り）に買い取られ、解体して運ばれた。⁽¹⁾

道をはさんだ向かい側は柴崎玄治郎の区画で、ここにもかつて大きなおんこの木があり、その根元には小祠があった。さらに坂道を進むと、区画がいくつか現存しているのを確認することができる。

茂木農場の隣接地は、埼玉県大里郡大田村大字飯塚四二番地船越茂七・豊司が明治三十七年一〇月一二日及び三十八年二月九日に貸付を受け船越農場と呼ばれていた。⁽²⁾『鉛川尋常小学校沿革誌（昭和六年六月）』（以下『沿革誌』 八雲町郷土資料館所蔵）には、「（船越農場は）現在ノ鉛川神社ノ峯続キニテ（中略）全盛期ニハ四五戸アリキ」と記されている。

茂木農場下段にある遊樂部川に近い区域は、鈴木国次郎の所有地であった。明治二三年秋に大阪の藤川清蔵により藤川農場が開かれ、鈴木国次郎は明治二九年に父善吉と共に愛知県より移住した。鈴木親子は藤川農場の最初の移住者である。そして明治三八年に藤川が死去すると土地が移住者一人に分配され、善吉・国次郎はこの区域を得た。また寛吾と同じく小鹿野町から移住した吉田一は、明治三八年一〇月二五日に指令第四五八六号を以て熊本県肥後国玉名郡鍋村大字鍋七六五番地立山哲壮より茂木清兵衛貸付地に隣接する区画の譲渡を受けている。寛吾の妻はまは一の父信太郎の妹で、寛吾三女のりは後に一の長男権助に嫁いだ。

『貸付台帳』の「借地人本籍現住所氏名」欄には「埼玉県武蔵国児玉郡本泉村大字太駄村五十四番地 農業茂木清兵衛」と記載されているが、中山清夫編『児玉記考』後編（中山風声堂 明治三四年）に本泉村の村会議員・衛生組長・消防組頭、甘楽社太駄支社系揚場支部長、所得納税者等として挙げられている「茂木清平」と同一人物で（以下清平）、吉田権助の自叙伝『農の人生——九十年の歩み』（吉田権助 平成元年）によると、清平は寛吾長男精一（明治七年生）の妻ちかの従兄弟であった。⁽⁴⁾ 清平は明治二四年から四三年までに四期に渡り本泉村村会議員を務め、⁽⁵⁾ 埼玉県第五区衆議院議員選挙人名簿（明治二七年七月）⁽⁶⁾ にも名前が挙げられている。また明治二九年七月一日開業の株式会社児玉銀行の発起人に名を連ね二〇〇株を所有する筆頭株主となり取締役を務めた他、⁽⁷⁾ 明治三〇年三月には株式会社児玉貯蓄銀行の発起人の一人として五〇株を所有する株主となった。⁽⁸⁾ 『貸付台帳』には「資産額一二万九七一九円」と記されている。

『朝日新聞』明治四〇年五月七日号及び四一年五月二七日号には、茂木農場開設時に清平が関わっていた「アダンバ帽子」の製造販売「清徳商店」の広告が掲載されている。後者では「日本製パナマ帽子」と謳っているが、明治三七年ごろパナマ帽が流行し、同時期に沖縄県ではアダンの葉を利用したパナマ帽の生産が興隆を見せていた。清徳商会はここに商機を見出し開設されたものと思われる。また清平は、明治四三年四月一日に設立された信用販売組合甘楽社本泉組では理事を務めた。⁽⁹⁾ なお前述した太駄村の住所（現本庄市）は、現在は空地となっている。

ここで、本泉村における北海道開拓への関心の高まりを示す例として、清平同様本泉村の名士で北海道開拓に携わった阪本喜平に触れておきたい。阪本は、明治三五年七月に長野県花村三千之助・高知県大井治秋が貸付を受けた茅部郡森村大字森村字オンコノキ岱宿野辺村字中野の土地を明治四一年四月に買い受けて阪本農場とし、小作二六戸を以て馬鈴薯・大豆・小豆などの生産を行った。⁽¹⁰⁾『児玉記考』によると阪本家は地頭大久保家の名主役を務め名字帯刀を許された「旧家」で、同書には「養蚕熱心家」としても挙げられている。⁽¹¹⁾明治二十四年から大正一四年まで八期に渡り本泉村村会議員を務め、大正六年には本泉村村長となり、大正八年九月から一二年九月には埼玉県議会議員も務めた。⁽¹²⁾議員を務めていたことから、阪本も清平同様不在地主であったことが分かる。なお阪本農場は全二六戸のうち埼玉県からの移住者は三戸のみで、他は秋田県八戸・愛知県五戸等により構成された。同農場は地縁を抛り所とするものではなかったが、二六戸中真言宗信徒が一二戸、禅宗信徒が一〇戸を占めていた。⁽¹³⁾

共に本泉村村会議員を務めた阪本・清平が北海道に農場を所有していたことから、同地における北海道開拓への関心度を知ることができる。また明治三六年四月一日付『朝日新聞』は、埼玉県北足立郡の各村の有志による北海道移住団が北海道へ向け出発することを報じている。茂木農場は、このような中で誕生したのであった。

第二節 移住まで

寛吾長男精一と妻ちかは、明治三四年四月に後志国磯谷郡南尻別村字上目名の田下農場に移住した。⁽¹⁴⁾精一・ちか夫妻の田下農場行きは、茂木農場開設の布石として位置づけることができる。そして田下農場における経験と所有者田下寅治から受けた感化が茂木農場に与えた影響は小さくないと思われる。蘭越町編・発行『蘭越町史』(昭和三九年)に「村の産業振興作に対し、最も協力的に実践したのは、田下農場であった。」⁽¹⁵⁾と記されているように、札幌農学校卒業生田下寅治が経営する田下農場は先進的であった。

田下は明治五年二月に新潟県下越後国新潟市に生まれ、小黒家の養子となり、札幌農学校予科を経て明治二九年七月に札幌農学校に入学した（明治三四年七月卒業）。有島武郎・森本厚吉らと同期である。在学中に田下姓に戻り、明治三一年一月に虻田郡狩太村字ニセコアン及び字昆布に畑六〇町歩余の貸付を受けて開拓に乗り出し、四三年一月に土地の付与を受けた。同農場は、全三〇戸のうち半数を真宗信徒が占めている。¹⁷⁾

そして明治三二年一月より、寅治と実父五郎七は後志国磯谷郡南尻別村字上目名の国有未開地の貸付を相次いで願ひ出て同地の開拓に乗り出したのであった。¹⁸⁾ また田下が明治三七年五月に農場内に開設した木工所では、明治四三年には従業員を北海道外から募集して大規模な造材業を行った。²⁰⁾ 大正九年一月三〇日及び昭和五年九月三〇日大日本帝國陸地測量部発行・昭和三二年一月三〇日地理調査所発行五万分の一地形図「潮路」にも田下木工所は記載されており、現在も「田下」の地名を残している。

『殖民公報』第五九号（明治四四年三月二八日）によると、田下寅治は札幌農学校予科に入学した明治二六年に国内各地の製材所の視察を開始し、機械や動力について英国に照会するなど、着々と木工所開設の準備を進めていた。また明治三三年七月下旬に行った修学旅行（筆者注*レポート作成のための実地調査）では、上目名の調査を行い報告書をまとめている（『夏期修学旅行報告 明治四三年八月農業乙科農業経済学第一九期卒業』北海道大学文書館所蔵）。そして卒業論文「北海道ニ於ケル新墾農場設計」（北海道大学農学部図書館所蔵）で田下は、理想の農場論を綴った。

田下農場では明治三三年に新潟県より一〇戸の小作を受け入れたが、「沍寒に際したるため皆其堵に安んぜず」という状態であったため国へ返し、翌三四年に埼玉県からの移住者数戸を受け入れた。精一とちかはこの時の一戸であると思われる。精一二六歳であった。「埼玉県人の成績最も優良なり」と『殖民公報』同号に記されているが、田下農場が小作人に養蚕を奨励し製糸も行っていたことは、同農場において埼玉県からの移住者が有為な人材たり得た要因であろう。ただし『北海道農場調査』によると、田下農場全四二戸中埼玉県出身は六戸と決して多くはなかった。²¹⁾

『農の人生』には、精一は「東京光玉舎中学」で学んだと記されている。⁽²²⁾ 明治一九年二月に開設された攻玉社中学土木科は卒業生の多くが台湾・満州などで活躍しており、「東京光玉舎中学」は攻玉社中学ではないかと思われるが、『攻玉塾生 総索引(写) (文久三—明治四五年)』(攻玉社学園資料室所蔵)に精一の名はない。しかし同科を卒業する生徒は約三八%と少なく(前掲史料には卒業生氏名のみ記載)、また一部の科目のみ受講した者は含まれないことから、精一がここで学んだ可能性はあり得る。いずれにしろ、精一はいずれかの教育機関で学び北海道移住に備えていたのであり、茂木農場の開設が周到に準備されたものであることがわかる。明治二〇年代から三〇年代にかけ北海道庁により世に送られた『北海道移住案内』(明治二四年)・『北海道移住手引草』(明治三三年)や、岩橋謹次郎『北海道開拓新論』(交詢社明治二五年)・久松義典『北海道新策』(前野長発 明治二五年)等の刊行物、さらには北海道協会(明治二六年三月設立)や民間の幹旋団体の活動、北海道毎日新聞社による全国遊説など、北海道移住を促す気運の影響も受けていたであろう。

また明治三〇年三月二七日に制定された北海道国有未開地処分法(法律第二六号)による北海道開拓の方針転換も、清平らが北海道移住に食指を動かした背景として挙げることができよう。同法第三条で「開墾牧畜若ハ植樹等二供セムトスル土地ハ無償ニテ貸付シ全部成功ノ後無償ニテ付与スヘシ」と規定され、「無償」で北海道に土地を取得することが可能になったのであった。安田泰次郎は『北海道移民政策史』(生活社 昭和一六年)で同法を、「府県より主として資本金乃至は有資力者を招徠し、彼等に特別の恩恵を与へ、以て彼等資本の力によりて本道拓殖の進展を図らん⁽²³⁾」とするものであるとしている。

安田が「彼等(筆者注*土地の貸付を申請する者)と雖も小作人を移住せしめんがためには尠少からざる費用を要する⁽²⁴⁾」と述べたように、貸付を申請する者には小作人を募集し当座の生活を保証するべく米などを支給するための資力が必要であった。清平が居住していた埼玉県児玉郡は蚕業地で、明治初期には蚕種の輸出隆盛から粗製乱造に陥り製糸業も振

るわなかったが、明治三〇年以降に蚕種業・製糸業双方の隆盛を見るに至った。従来、北海道移住の原因として生業の不振や生活の困窮が挙げられてきたが²⁵、土地の貸付を申請する者は経済的なゆとりがあるからこそ北海道開拓に踏み出し得たのである。茂木農場の開設は、児玉郡の蚕業の隆盛により実現し得たと言えよう。また従来貸付地予定存置の特典を与えられてきた団結移住者の条件が、明治三〇年四月二三日に北海道庁令第二四号を以て三〇戸から二〇戸に改正されたことも、茂木農場開設の背中を押した要因として挙げることができる。

一方安田は、同法により「大土地の処分せられしものを多からしめ、延いては投機的資本家をして土地投機の弊風を発生せしめ」たことを挙げており、後述するように茂木農場もその例に漏れない。しかし茂木農場は、「其結果は多くの未墾の私有地を残して今日民有未墾地の開発として多大の費用と労力とを用ひざる可らざるの結果を醸成し、更に他方に於て小作人を増加せしむる²⁶」という結果とは、聊か異なる道を歩んだのであった。

第三節 茂木農場の人々

『^{茂木}船越川教育所新築備附人名帳（明治四十年参月八日吉日）』（以下『人名帳』 八雲町郷土資料館所蔵）には、船越農場及び鉛川住民が名を連ねた後、「柴崎玄治郎²⁷」で始まり「茂木農場監督人茂木寛吾」で終わる六ページがあり、これが明治四〇年三月当時の茂木農場の居住者であると思われる。表1で示した。大島「茂木農場と中里大蔵少年」他により移住年がわかるものは示した。計二四名であるが、寛吾の親族吉田一が含まれており、茂木農場は全二三戸により構成されていたのである。『貸付台帳』の「起業方法」欄には、茂木農場には初年八戸、二年目八戸、三年目六戸の小作が移住し、二年目には事務所、三年目には道路を開設するとの予定も記されているが、最終的にはほぼ予定通り移住を終えたと言えよう。また既に移住した者を頼り後に茂木農場に入った者もあり、大島によれば四〇戸程居住していた時期もあった。茂木農場の住民はそれぞれの持ち分を約五町歩（約五ヘクタール）とし、「茂木農場内に土地を持っているとい

表 1 明治 40 年茂木農場居住者

移住者氏名	移住年	備考	
柴崎玄治郎	37 年		小鹿野町
山内善太郎	37 年		田下農場
茂木馬太郎	37 年	船越農場	本泉村
横田茂重郎	37 年	船越農場	
茂木大輔			
高橋梅吉	39 年		
引間平馬	39 年	息子船越農場	寛吾親族
吉田一	39 年		寛吾親族
黒沢弥作	38 年		柴崎小作？
木村和助	37 年		
柴崎雄三	39 年		
高岸学重	38 年		
新井良次			
中里大蔵	38 年		本泉村
加藤元吉			
深沢茂吉	39 年		
木村三吉	37 年		本泉村
川村百吉	38 年		
加藤伊三郎			
今井市作		船越農場	
中井利吉			
瀧村石三郎			
青木力			
茂木寛吾	39 年		小鹿野町

う感覚だった」（中里秀男氏（大正一四年生）という。安田は『北海道移民政策史』で自作農に対する無償付与は五町歩が標準であったことを指摘しているが、茂木農場においては自作農同様の土地所有者たる意識に支えられた開拓の営みがなされていたのであった。

『人名帳』筆頭の柴崎玄治郎（昭和一四年二月一三日没

享年六六

移住時三五歳）は小鹿野町で質屋を営んでおり、

後に茂木農場の農場監督人を務めた。玄治郎長男又兵衛は身体が弱かったこともあり農場の仕事を経がず勤め人となり、後に茂木農場で酪農業を開始するにあたり大きな役割を果たした。次男範次は鈴木国次郎の小作人となり、農場を継いだ三男重行は木彫り熊の制作で著名である。なお又兵衛には易学の素養があり、弟繁行を重行に改名させた。

山内善太郎は精一夫妻が勤めていた田下農場からの転住で、農場内において指導的役割を担った。茂木馬太郎は本泉村からの移住で、後に木彫り熊の作品を残した茂木多喜治（明治三五年生）の父親である。なお『道南民報』連載の「郷土人物月旦 二九」（昭和三三年一二月一七日）には、多喜治は明治三八年四月一〇日に父馬太郎に伴われ渡道したとある。馬太郎と横田茂重郎は後に船越農場に移り、多喜治は木彫り熊の制

作を始める前（昭和初期）には函館港で築港工事に従事していた。多喜二も「茂木」姓を名乗った。

引間平馬は寛吾の姉みやの夫で秩父郡久那村から一家七人が移住し、息子忠蔵は後に舩越農場に入った。平馬の他に引間家は二戸あり（うち一戸は柴崎玄治郎の小作）、引間光一の息子二郎（大正一三年生）は昭和三八年に交通事故により離農して木彫り熊の制作を開始し、八雲町内に「木歩の店」を開店した。他に今井も舩越農場に移った。

中里大蔵は父額次郎に伴われ明治三八年三月一六日に本泉村から茂木農場に入ったが、翌明治三九年一月一三日に額次郎が死去したため、一六歳で一家の仕事を担うこととなった。明治末には田下木工所で働いていたこともあった。移住当時二歳であった弟伊三郎は、後に木彫り熊の作品を残している。また木村三吉は本泉村の中里額次郎家で養蚕に携わっており、一足早く移住していた。

「茂木農場と中里大蔵少年」には、この他に茂木円助・加藤作次郎（いずれも明治三八年移住）、佐々木左門・加藤某（いずれも明治三九年移住）が挙げられており、『人名帳』にある加藤元吉・加藤伊三郎・茂木大輔の関係者であると思われる。佐々木は宮城県出身で、これ以前より北海道在住であった。移住者の移住前の居住地を全て明らかにすることはできないが、清平が居住している本泉村からの移住が数戸確認できる他、大宮駅で寛吾一家と合流した移住者もおり、地縁により移住した者がいたことがわかる。これも茂木農場の開拓の支えとなったと思われる。

茂木農場監督人たる寛吾は、安政四年生まれで小鹿野町において農業（六町五反八畝歩所有・酒造業を家業とする傍ら小鹿野町副戸長を務め、明治一五年五月から一八年一二月には埼玉県議会議員を務めた。北海道移住時には五〇歳である。寛吾は、明治三九年四月に妻はま・次男隆亮・次女利久・三女のりと共に茂木農場に入った。長女淑女は既に嫁いでいたため渡道せず、長男精一夫妻は前述の通り田下農場に入っていた。

『目名町郷土史』明治三八年の項に「田下農場支配人茂木清一、八雲より転住し来り、自宅で附近の子供四人程度の教育を行ふ。」とあるが、田下農場開設時の管理人は田下鹿造で明治四三年の項には「田下農場管理人保科雄次郎」と記さ

れていることから、明治三〇年代後半から四〇年代初めにかけて精一は「田下農場支配人」であったと思われる。田下農場の小作の契約期間は一〇年であるため、契約期間満了後精一・ちか夫妻は茂木農場に入ったと思われるが、その後も田下との関係は継続した。なお精一の自宅で始められた教育機関は、貝殻沢簡易教育所(明治三九年五月 四年制)、第七尋常小学校(明治四一年四月 六年制)、上目名尋常小学校(大正五年七月)、田下小学校(昭和二年四月)として地域の教育を担ってきたが、平成八年三月に廃校となった。

寛吾次男隆亮は鈴木国次郎の小作人となり、後に会社員になった。⁽³⁶⁾ 次女利久は、後に八雲を離れ東京暮らしとなり、水野秋造と結婚し夫の郷里岐阜県で没した。

寛吾と玄治郎の移住前の関係は不明であるが、移住に先立ち玄治郎の弟只吉(昭和一年八月一九日没 享年七二)が茂木家の養子となって茂木姓を継ぎ、酒造に用いる米のとき汁で赤平川が白く染まることから「白水屋」とよばれていた茂木家は、通称柴崎とよばれるようになった。そして寛吾は八雲で新たな姓である「茂木」を名乗ったのである。ただし茂木寛吾名義の土地(山林及び畑)を小鹿野町に残しての移住で、後に息子精一・孫蔵六への名義変更も行われている(茂木紀久男氏所蔵文書)。赤平川沿いの茂木家の跡地は、現在は水田になっている。なお聞き取り調査によると茂木只吉の親族茂木良光とその妹が一時八雲にいたことがあり、小鹿野町の茂木家と八雲の茂木農場との関係が続いていたことがわかる。

一方玄治郎は八雲へ、質屋で所有していた骨董品類を持参した。農場経営資金に困窮した場合の備えである。そして掛け軸などが売却されている様を、重行の息子宏明(昭和一五年生)が眼にしている。玄治郎も小鹿野町に土地を残しての移住であった。

寛吾は小鹿野町に経済的基盤を維持して「茂木」の姓の存続をも図り、その上で八雲では「茂木」という新しい姓を名乗った。そこには故郷に錦を飾るという意識は見られず、八雲に根を下ろす方策を冷静に実行する姿勢を読み取るこ

とができる。一方移住前の茂木家と柴崎家の養子縁組には両家の結束の強さを見ることができ、これも茂木農場が長く存続した一因として挙げられよう。

そして寛吾・玄治郎・引間のように、父親は茂木農場で働き息子は他家へ支配人・小作人などとして出たり勤め人になったりするという例が見られるが、給金を得、また食料をも他家で賄わんとするもので、開拓地で生き延びるための方策であると言える。そしてこれらは、茂木農場の開拓を支える一助ともなったのであった。茂木農場は、このような営みに支えられていたのである。

第四節 鉛川で生きる

前述の「鉛川教育所」は、鉛川小学校の前身である。藤川農場住民の子弟を初め鉛川の住民の子弟は、大関農場（明治二八年開設）農事事務所の一室に設けられていた大関尋常小学校（明治三三年五月開校）に通学していた。茂木農場住民の子弟も同様である。しかし大関農場の拡大に伴い同校が移転して鉛川から遠くなり通学が困難になるため、鉛川住民は協議の上特別教授場の開設を請願し、明治四〇年四月一日に八雲村字鉛川一九番地に大関尋常小学校付属鉛川特別教授場を開設したのであった（四年生まで通学）。教授場の開設にあたり鉛川及び大関農場の住民に二度にわたり寄付を募り、延べ九三名から総額一三一円八五銭を得て校舎を新築し（『沿革誌』）、鈴木善吉より三〇〇坪の敷地の「五ヶ年間寄附」³⁷を受けた。

その後先に建築した校舎を売却し、不足分二〇〇円を住民の寄付金により補い大正元年に新校舎が建設された。そして大正二年五月より六年生まで通学することとし、同年に八雲尋常高等小学校付属鉛川特別教授場となった。大正九年には児童数が最多の六七名となり（『沿革誌』）、同年四月に鉛川尋常小学校に改組・改名し、昭和一〇年四月には小学校令に基づく鉛川尋常小学校となった。同校の展開からも、鉛川の発展の様を見ることができる。

『沿革誌』の「寄附二関スル事項」には、「通学区域内一同」より黒板・教卓・椅子（明治四〇年五月）、時計・障子・畳（同年一月）、掛図・国旗（大正四年一月）、オルガン（大正六年五月）などが寄付されたことが記されている。また寛吾が大算盤（明治四〇年五月）、木村和助が榎松一本（大正四年五月）、玄治郎が万国旗一組（昭和九年九月）を寄付した他、昭和二年より茂木農場の所有者となった神林知雄の父虎雄も昭和五年六月に「現代海戦概念図」「戦艦陸奥図」各一点を寄付している。

鉛川特別教授場の開設・維持から、茂木農場の住民が共同で鉛川における生活の場を築かんとしていた様を見ることができる。なお鉛川小学校は、昭和一六年四月に鉛川国民学校、二二年四月に鉛川小学校となったが、昭和四二年四月一日を以て廃校となった。

移住者の思いは、農場内の社をめぐる営みにも見ることができる。柴崎玄治郎の区画の入り口にはかつて大きなおんこの木があり、その根元には小祠が置かれ中には高さ三〇センチほどの陶器のキツネが祀られていた。北海道の稲荷社は移住者が本州から伴ったものが多い。小鹿野町には旧茂木家付近の高根神社内の稲荷社を初め豊田稲荷神社等数社があるが、茂木農場内の稲荷社との関係は不明である。茂木農場であるにも関わらず玄治郎の区画に祠があるのは、このおんこの木が農場内で最も大きかったことによる。

『殖民公報』第五一号（明治四二年二月一七日）は、移住地における「薄志弱行の徒は忽ち廉恥の思想を失ひ人格を墮落せしむるの弊」を指摘し、それを正す手段の一つとして「神社仏閣の設備」を挙げ、「五節句の年中行事春秋に於ける祭典の如きは農家の生活上最も適切な慰安の途」であるとしている。「神社仏閣の設備」とは、移住にあたり地元の神社を分社したものでなく石・棒・切り株等を神体とする場合もあり、茂木農場内の小祠も同様のものではあったと思われる。茂木農場関係者への聞き取り調査では、この小祠が篤い信仰を集めていた様は特に感じられなかったが、移住者が無事と開拓の成功を祈り祀ったものであろう。

そして『沿革誌』には、「昭和八年九月元鉛川神社ト元茂木農場神社（八幡神社）ト合併シ現在ノ箇所ニ移転ス」と記述されている。合祀の理由は不明であるが、茂木農場の人々が鉛川に溶け込んだ証左ともとれるのではないだろうか。なお現在小祠はなく、陶器のキツネの所在も不明である。

天照大神を祭神とする鉛川神社の由来は不明であるが、祠の傍に明治三十九年九月一日に藤川農場関係者により建立された「藤川君開墾紀念之碑」があることから、同神社は藤川農場関係者の手によるものと思われる。聞き取り調査によると、鉛川の住民は愛知県からの移住者が多いが徳川家開墾試験場等の関係者はいないとのことである。鉛川神社の祭りは毎年九月一日に行われていたが、この碑の建立に由来するものであろう。この祭りでは大人には酒が振舞われ子ども相撲が行われていた時期もあり、茂木農場住民も足を運んだ。鉛川神社は鉛川の住民及び茂木農場・吉田農場（吉田一の農場）を氏子とし、移転を繰り返しながらも世話役により維持が図られてきたのである。

柴崎重行が息子宏明に語ったところによると、鉛川神社の祭りでは茂木農場の住民に鉛川の住民も加わり、「本格的な」芝居が行われていた。歌舞伎のような芝居もすれば、『三銃士』『レ・ミゼラブル』等の場合もあり、浄瑠璃の小道具等も所有していた。戦前は茂木農場内で、戦後は鉛川小学校内で芝居が行われ、他の農場や八雲の市街地からも観客が訪れた。戦後の娯楽の少ない時期には函館へ上演しに行ったこともあった。

小鹿野町では江戸時代に誕生したとされる地歌舞伎、児玉郡では神楽が各地で受け継がれており、その経験を生かしたものであったと思われる。鷹田和喜三は『北海道の村落祭祀研究——母村と移住村の比較研究——』（拓殖大学研究所昭和六一年）で「信仰的行事よりも社交・慰安的の性格の行事」は継承されにくいことを指摘しているが、出身地に由来する営みが移住者の紐帯となった例を見ることができる。そしてこのような芝居を演じるという気風は、木彫り熊の制作者を育んだ要因としても挙げることができよう。

注

- (1) 大島日出生「茂木農場と中里大蔵少年」『ゆうらふ』第三号 昭和四四年二月一日
- (2) 『沿革誌』には「船越」と記述されている
- (3) 中山清夫編『児玉記考』後編 中山風声堂 明治三四年 一五一～一六三頁
- (4) 吉田権助『農の人生——九十年の歩み』吉田権助 平成元年 二九頁
- (5) 小暮秀夫編『武蔵国児玉郡誌』児玉郡誌編纂所 昭和二年 四五～四七頁
- (6) 児玉町教育委員会児玉町史編さん委員会編『児玉町史』近現代資料編 児玉町 平成一四年 八四頁
- (7) 『児玉町史』近現代資料編 八〇八頁、『朝日新聞』明治三三年六月二六日
- (8) 『児玉町史』近現代資料編 八一五～八一六頁
- (9) 『児玉町史』近現代資料編 一〇八～一〇九頁
- (10) 北海道庁編『北海道農場調査』北海道庁 大正二年 三七一～三七二頁
- (11) 『児玉記考』後編 一五八～一六一頁
- (12) 『武蔵国児玉郡誌』四八頁
- (13) 埼玉県議会『埼玉県議会80年の歩み』埼玉県議会 昭和三四年 三〇頁
- (14) 『農の人生』一八頁
- (15) 蘭越町編『蘭越町史』蘭越町 昭和三九年 一九一～一九二頁
- (16) 札幌農学校編『札幌農学校一覽』札幌農学校 明治三二年、『札幌農学校簿書』第九〇六号、同九六四号 北海道大学 文書館所蔵
- (17) 『北海道農場調査』二六三頁
- (18) 蘭越町史編纂委員会編『新蘭越町史』蘭越町 平成一一年 八九三頁

- (19) 上野繁『目名町郷土史』上野繁 昭和四六年 三五頁
- (20) 『目名町郷土史』 八三頁
- (21) 『北海道農場調査』 三二五―三二六頁
- (22) 『農の人生』 四五頁
- (23) 安田泰次郎『北海道移民政策史』生活社 昭和一六年 二五六頁
- (24) 『北海道移民政策史』 二五七頁
- (25) 中村英重『北海道移住の特質と移動動態』『歴史地理学』第四四卷第一号 平成一四年 他
- (26) 『北海道移民政策史』 二五九頁
- (27) 現在は「柴崎」の表記を用いていることから本稿では「柴崎」と記述する
- (28) 『北海道移民政策史』 三三二頁
- (29) 『農の人生』 一四頁
- (30) 『農の人生』 四二頁
- (31) 『農の人生』 二六頁
- (32) 茂木和平『埼玉県苗字辞典』茂木和平 平成二〇年 七六九四頁
- (33) 『埼玉県議会80年の歩み』 二八頁
- (34) 『目名町郷土史』 一五頁
- (35) 『北海道農場調査』 三二六頁
- (36) 『農の人生』 六三頁
- (37) 『教育所第二回追加附帳 (明治四拾年第四月吉日)』 八雲町郷土資料館所蔵
- (38) 鷹田和喜三『北海道の村落祭祀研究 ― 母村と移住村の比較研究 ―』拓殖大学研究所 昭和六一年 二二五頁

第二章 酪農と木彫り熊

第一節 茂木から柴崎へ

清平が貸付を受けた区画は明治四一年三月一二日に付与の申請が行われ、四三年七月二日に全区画が付与された。付与時には畑一〇四町五段七畝二六歩で、明治四三年九月五日に「茂木清兵衛」の名義で登記が行われた（日付は登記受付日⁽¹⁾）。

なお隣接する船越農場は、茂七が貸付を受けた区画は明治四二年九月二〇日に、豊司が貸付を受けた区画は明治四四年一〇月二三日にそれぞれ付与され、畑計五八町一反四畝（約五九ヘクタール）であった。船越農場については、「茂木農場と中里大蔵少年」に「何戸分も払下げを受けたのであるが、五戸より入植しないので道庁から取上げられてしまった。それを茂木精一が個人で払下げを受け小作人を入れた。」とあり、付与後茂木農場に編入されたと思われる。なお「五戸より入植しない」とあるが、『人名帳』には「船越人名」として橋本芳平・鈴木栄三郎・直山堅吾・船越香一・内田逸作・堀口弁造・土橋音松・小沢作太郎の八名の名が記されている。

清平が経営する清徳商会は、明治四三年一二月八日に四〇〇〇円の約束手形の担保として茂木農場を抵当に入れ（日付は登記受付日）、大正四年五月七日（登記受付日）に同農場の債権が埼玉県児玉郡若泉村大字渡瀬六〇六番地原鉄五郎に移った⁽¹⁾。北海道国有未開地処分法では貸付期間中に貸付地を債務の担保とすることを禁じているため⁽²⁾、付与後担保に入れたものと思われる。ここから、清平が投機目的で同農場の土地を取得したことがわかる。原は大正元年一二月九日より若泉村村長を務め⁽³⁾、『児玉記考』後編には「旧家」として挙げられ「県下屈指ノ財産家」⁽⁴⁾、「第二銀行ノ頭取ヲ勤メ徳望勢力其名全国ニ普シ⁽⁴⁾」とされている。

清平が茂木農場を手放すこととなった理由は不明であるが、清徳商会が扱うアダン葉帽子の生産はますます隆盛を見

表 2 茂木農場所有者（戦前期）

登記受付年月日	名義人	名義人住所
明治43年 9 月 5 日	茂木清兵衛	埼玉県児玉郡本泉村大字太駄 54 番地
大正 4 年 5 月 7 日	原鉄五郎	埼玉県児玉郡若泉村大字渡瀬 606 番地
大正 5 年 1 月11日	山村芳夫	滋賀県犬立郡彦根町大字式番 75 番地
大正 6 年 6 月 9 日	秋山専蔵	宮城県栗原郡姫松村片子沢字石砂田 47 番地
大正 7 年 8 月 3 日	植木義三郎	兵庫県武庫郡精道村芦屋字申新田760番地ノ 3
大正10年11月19日	植木リク	東京市芝区白金今里町 77 番地
大正12年 7 月 7 日	樫部保	東京市牛込区天神町 691 番地
昭和 2 年 5 月28日	神林知雄	東京市牛込区市谷富久町 16 番地
昭和10年 6 月 3 日	株式会社北海道拓殖銀行	札幌市大通西 3 丁目 7 番地

『粗悪移記閉鎖(8)鉛川④』より作成

せており、蚕糸業に原因があつたのではないかと思われる。岡部栄信著・発行『山口太三郎翁の面影』（大正二年）によると、「大正三年セルビアの一発から欧州の平和は破れて戦雲漠々八月二十三日遂に日独戦線の詔勅が煥発せられまして我事業界に一大番狂はせが生じ糸価は暴落して上一番七百元台に陥り蚕糸業界は実に惨憺たる光景を呈するに至りました。」⁽⁵⁾という状況であつた。また大正期における北埼玉・南埼玉両郡の新興養蚕地帯としての台頭、埼玉県下における蚕種の統一の影響の他、第一次世界大戦による投機熱の中での何らかの事業の失敗も原因として考えられる。

茂木農場一帯の土地所有者は表2のような変遷を見た（戦前期のみ）。寛吾は茂木農場が清平の手を離れた大正四年にこの世を去り（大正四年四月二一日 享年五八）、精一が後継者となつた。八雲村の馬鈴薯澱粉製造が発展を見せていた時期である。そしてその後、第一次大戦終結による澱粉の売れ行き不調と地力の低下による馬鈴薯生産の行き詰まりにより酪農業への転換が図られた。茂木農場は、このような転換期に売買が繰り返されたのである。

精一は「茂木農場監督人」と記した史料が散見される程度で、その足取りを追うことはほとんどできず、聞き取り調査においても存在感がなかったという話を聞けばかりであつた。聞き取り調査では、精一は親族である吉田の近くに居住していたとの話も聞かれたが、大島が「精一も上目名の

カイガラ沢(筆者注*田下農場)にいて年に一、二度よりこなかった」と記したように、精一は田下農場の業務に従事していたのではないかと思われる。大正中期から後期にかけて、田下農場を擁する目名地区では養蚕が隆盛を見せていたのであった。^⑥ また蔵六次男紀久男(昭和一五年生)が田下で生まれていることから、精一と田下の関係が続いていたことがわかる。ただし、転入者を記した『目名町郷土史』に茂木精一及びその家族の名前を確認することはできない。また田下寅治の父五郎七は、明治四二年一〇月一〇日に八雲村大字山崎一二七番原野の売払を申請し翌明治四三年二月二一日に一三六〇町余りを取得しているが(『貸付台帳』、『殖民公報』第五九号によると田下はここで木工所を営む予定であることから、精一がここに関わっていた可能性も考えられる)。

以上のことから、茂木農場が清平の手を離れたことに伴い、前所有者の親族である精一も茂木農場から手を引き、柴崎玄治郎が茂木農場の監督人になったのではないかと思われる。玄治郎は茂木農場の監督人を務める傍ら、八雲町農会実行委員などを務めた。^⑦ 寛吾の区画は「茂木さん跡」とよばれ、中里が畑作を行った。

第二節 所有者の変遷

前述したように、大正四年以降茂木農場の所有者は再三に渡り入れ替わった。史料で所有者を追ってみたい。

茂木清平から原鉄五郎の手に渡った茂木農場は、山村芳夫^⑧を経て秋山専蔵の所有地となった。山村について詳細は不明である。「秋山専蔵」の名は、『官報』第六〇九八号(明治三六年一〇月二八日)の「叙任及辞令」欄に「依願免司法官試補(註三)司法省)司法官試補 秋山専蔵」とあるのを見ることができる。また大正一一年四月二五日には、秋山専蔵編『上は国母より』が興国社より刊行されている。同書は、「近時人文の進歩著しく、思潮の急湍は世界を挙げて其渦中に投ぜんとす。随つて男女の位置権限自ら動揺して、夫唱婦隨の道德に晏如たらざるものあり。是素より当然の推移にして、女子の自重自覚に竣たざれば国家の存在を危ふす」という社会状況の中、「歴代の皇后より、下士農の婦女に至る

まで、範たり師たるべき賢婦才媛」を挙げ「一編一評を加へて新古道徳の調和点を見出」さんとするもので、天照大神に始まり農夫の妻に至るまで一一一名の女を取り上げ論じている。ただし同書に秋山の住所は「東京市神田区堅大工町二十一番地」と記され、興国社の住所も同様である。ここに挙げた「秋山専蔵」が茂木農場所有者の秋山と同一人物であるか否かは不明である。

大島は、秋山が所有者であつた時期の茂木農場について次のように記している。

茂木農場を秋山（仙台の人）という人が買つて秋山農場となり、監督にきた菅原新七という美術学校出の若い人がいた。若い絵をかく人で（中略）ここへ青年の監督がきたので、農場の青年たちが事務所へ集り、いろいろの事をやり、文化センターであつた。芝居、かるた等あらゆることに青年が集り、なかなか活気があつた。

『東京美術学校一覽』の「卒業生姓名」「生徒姓名」のいずれにも菅原の名はないが、美術の素養のある若者が農場監督人を務め、彼を慕う若者が集まつたのであろう。そしてこれにより、茂木多喜治が「元氣のよいそして進歩的な精神に充ち溢れた人達が多かつた。時には危険思想の温床として誤解されたこともある程であつた。」と述べたような氣風が醸成されたのである。そしてこれは、茂木農場が木彫り熊制作者を輩出する素地となつたのであつた。

秋山の次に土地所有者となつた植木義三郎は、安政三年一月七日に周防国都濃郡徳山町の檜部三造の第四子として生まれ、明治五年に植木家の養子となつた。警察官を経て明治一三年に赤間関々港社に入社したのを皮切りに大阪同盟汽船取扱会社・大阪商船株式会社と海運畑を歩み、見田尻支店長や釜山支店長などを歴任した。そして明治四二年五月に「暖簾分」の形で合資会社商船韓国組代表社員となつたのである。茂木農場の所有者であつたのはこの時期であるが、海運業に携わつていた植木は貿易の動向にも敏感で、第一次世界大戦により輸入品が減少する中、早くから酪農業と乳製品生産が行われ澱粉景氣に沸く八雲村に着眼したのではないかと思われる。⁽¹²⁾ 植木は、「清廉にして厳正、極めて名利に恬淡にして、殊に金錢に潔白、飽迄理に抛り、正を守り、行を篤くし、信を尚ぶ、而かも理義に明に、自信に強く、情

義に敦く、風貌自ら古武士を偲ばしむる」人物であった。¹³⁾

大正一〇年三月一日に家督相続を受けた植木リクは義三郎の妻で、義三郎はこの頃死亡したと思われる。その次の土地所有者は榎部保であるが、義三郎の旧姓が榎部であることから、義三郎の親族であると思われる。義三郎・リク夫妻には娘がいたが、「家名よりも子孫の幸福に重きを置」くべく娘をリクの生家に入籍させていた。そのため茂木農場を榎部に売却したのであろう。¹⁴⁾

昭和になり茂木農場の所有者となったのは神林知雄である。前述のように父虎雄が鉛川尋常小学校に寄付を行っており、茂木農場の所有は私立帝国殖民学校・露清語学校・開拓者学院等を開設し「海外ニ於ケル新事業ヲ経営セントスル者」の育成を行わんとした神林虎雄（明治九年生）の意志によるものと思われる。神林は新潟県出身で、明治三五年九月二六日に東京府に提出された「私立帝国殖民学校設立申請書」（東京都公文書館所蔵）によると、私立東京商業学校・私立国民英学会・私立東京簿記学校・私立独乙協会学校独乙語専修科などを卒業している。明治三六年五月一二日付『朝日新聞』は神林他三名が「外務省に到り珍田総務長官に面会して満洲問題に関し当局の方針を質したる」と報じており、神林がこの時期既に開拓の分野において一言を持つ人物として認識されていたことがわかる。また明治三七年一月二九日付同紙は、「帝国殖民学校の同志は戦時に於て貢献せん為め殖民義団を組織」したと帝国殖民学校の活動を報じている。

中西利八編『新日本人物大系』（東方経済学会出版部 昭和十一年）には、大正後期以降の神林の活動が次のように記されている。

同九年九月校友（筆者注*開拓者学院学生）及同族を以て資本金二百五十万円（払込六十二万五千元）の株式会社開拓社に改め取締役社長に就任す本社を東京市麹町区内幸町に出張所を英領新嘉坡に置き年来収容薫陶せる子弟後進を誘導して縦横に活躍し北海道千島の開拓を始め朝鮮滿蒙及び蘭領東印度等の各地に於て大いに利源の開発に努力

す又十数年来家業として北海道八雲及び釧路に於て農場を経営す

「大いに利源の開発に努力す」とあるが、神林は利源調査会理事長という肩書きも有しており、国内外の開拓を進める活動を行っていたのであった。茂木農場を所有することは、その一環として位置づけることができる。なお釧路の農場については詳細は不明である。神林が明治三九年二月六日に東京府に提出した「専門学校設立認可申請書」（東京都公文書館所蔵）に添付された履歴書では「家業」を「鉱山業・拓殖業」とし、「忠清南道平沢郡字月里、井清里、平沢等所在八百参拾余町歩ノ原野ヲ開拓シツ、農業ヲ経営ス」と記されている。神林知雄が茂木農場を所有した期間は短かったが、農場を手放した後に神林虎雄が農場を訪れたことを玄治郎の孫宏明は記憶しており、神林にとり茂木農場は心に残るものであったようである。

その後茂木農場は、函館区裁判所において競売にかけられ北海道拓殖銀行の所有地となった。なお同行は、茂木農場のみならずその周辺の土地も取得した。¹⁶⁾

相次ぐ土地所有者の変更の中、所有者に共通点を求めることはできない。北海道開拓の志を持つ所有者もいたが、投資の対象としてしか見ていなかったのではないかと思われる所有者もいた。しかし大切なことは、このような所有者の変遷の中で、後述するように茂木農場の住民が酪農業の導入に成功したことである。所有者が変わろうとも柴崎玄治郎を中心に日々の営みを続けた強さが茂木農場の特長であると言える。昭和初期において八雲町（大正八年一月一日町制施行）では、石川農場（四九戸）・ユウラップ（旧大関）農場（三八戸）等で自作農創設が進んだが、¹⁷⁾茂木農場はそれとは異なる道を歩んだのであった。

第三節 八雲の農業の展開の中で

次に、茂木農場の生産活動について見ていきたい。

徳川開墾試験場では明治一年の開墾と同時に馬鈴薯の栽培を開始し、明治三年には八雲・山越内両村の総作付面積の三割を占めるまでになった。澱粉生産に使用する機械は、辻村勘治や小川助次郎らの試行錯誤を経て明治三〇年に川口良昌により川口式澱粉製造機が発明され、その製品は「八雲片栗粉」として明治四〇年には全国一の高値で取引されるに至ったのである。⁽¹⁸⁾ 日露開戦により馬鈴薯が「馬鈴薯切干」の製造に向けられ、澱粉は馬鈴薯切干の残余物を利用して製造することとなり澱粉製造の発展は一時頓挫したが、⁽¹⁹⁾ その後再び澱粉の製造量は増加し明治三八年七月には八雲片栗粉同業組合の設立もみた。八雲村は函館・小樽の市場に近い⁽²⁰⁾ため、十勝・網走地方に一〇年以上先駆けて澱粉製造が定着したのである。なお馬鈴薯切干とは皮をむいて薄切りにした馬鈴薯をゆでた後揚げたもので、安政・文久年間に早くも製造が始まっていた。

『殖民公報』第一五号(明治三六年七月二八日)によると、明治三五年における八雲村の澱粉製造者は七八戸で、半数以上の五〇戸が水車を利用して⁽²¹⁾いた。一斤六〇〇匁(約二二五グラム)あたりの最高価格は、明治三〇年には六錢五厘であったが、五錢台の年を経て三五年には八錢八厘と上昇して「販売品として大に好評を博し各地に於て比較的高き価格を有し」、「露領浦塩斯德及朝鮮等にも輸出」という地位を築いた。また八雲町は後に酪農で知られることとなるが、明治三九年に石川農場で牧牛事業が開始され翌年よりバター⁽²²⁾の製造を開始し、大正元年には「笹印バター」として発売された。

このように八雲村は、馬鈴薯栽培・乳牛飼育といった新しい農業とそれに基づく商品生産を実践していた地域であり、茂木農場はこれらが隆盛を見せていた時期に開設されたのである。また『北海道農業発達史』は、道内の澱粉製造業一戸あたりの平均年間製造量が五一袋であるのに対し、山越郡では二〇六袋で大規模な澱粉製造を行う製造業者が多かったことを指摘している。⁽²³⁾ このように大規模な生産活動を展開したことは、後に八雲町で酪農業を展開する素地となったと思われる。

なお澱粉生産は、澱粉の主要輸出国であったオランダの製品が第一次大戦開戦により途絶し、それに代わり北海道産の澱粉が海外市場に進出したことにより「澱粉景気」に沸いたものの、戦後澱粉の価格が暴落し農家数が著しく減少する傾向が見られた。しかし全町で四〇〇町歩前後の馬鈴薯の作付面積は維持されて澱粉生産も継続され、昭和五年の八雲町内における澱粉製造工場は一九であった。⁽²³⁾そして北海道産澱粉は東南アジアを新たな輸出先として獲得し、紡績業における澱粉の需要にも助けられ、昭和初期に新たな展開を見せたのである。

その一方で八雲町の農業者は種子用男爵薯の生産に活路を見出し、馬鈴薯萎縮病をほとんど見ないことで評価された。⁽²⁴⁾『農友』第三巻第八号（昭和六年八月三〇日）は八雲町における「牧草跡地の馬鈴薯栽培の如きは、肥料及病害の見地よりして最も進歩した方法」と述べており、酪農と馬鈴薯栽培は八雲町の農業の両輪たる役割を担ったのである。

茂木農場では、移住当初はまずいなきび・ひえ・とうもろこし等を自給用として、菜種を販売用として栽培し、その後大豆や燕麦等を栽培した。土地が肥沃で肥料は不要であったが、九月二〇日頃には霜が降りるため早生の品種しか栽培に適さないという問題があった。⁽²⁵⁾自家用馬鈴薯の生産も開始し、澱粉製造隆盛期には寛吾次男隆亮が澱粉製造を行った。⁽²⁶⁾

茂木農場の小作料は不明である。『北海道農場調査』には各農場の「小作契約ノ概要」が示されているが、五、六年目より小作料が徴収される農場が多いものの様々である。そして小作料が金額で示されている農場がある一方、「小作料ハ毎年九、十月ニ馬鈴薯ヲ以テ納付セシム」（増田農場）・「物納ヲモ許セリ」（岩盤農場）という例も見られる。⁽²⁷⁾なお茂木農場では、最初の三年間米・味噌が支給された。⁽²⁸⁾

農場内の樹木の利用については、大島は中里大蔵の話を次のように記している。

よい材料は売れたけれども、売れるようなよいのは地主である農場主のものだった。

（中略）

(トドマツが)原木として切り出し売れるようになったのは、しばらく後のことである。せん、なら等もあつて枕木に売れた。ならの大木があつて枕木六、七丁もとれるのを業者に願つて切つてもらい、ただでやつてしまった。馬鹿なことをしたものである。後に薪として売つたこともあつた。(中略) 入植十年位たつてからのことである。

開墾作業において樹木の処理は大きな労苦を伴うものであるが、次第に収入に繋げる知恵を身につけていった様が見てとれる。なお冬季には上鉛川の山林や田下の木工所へ出稼ぎに行くこともあつた。

大正中期になり、馬鈴薯栽培に代わる新たな生業として着目されたのが酪農業である。第一次世界大戦の勃発により輸入練乳が途絶する中、国内の練乳製造業は既に発展の兆しを見せていた。

横井時敬が『畜産経済』(子安農園出版部 大正九年)で「元来乳の価は日本では却々高い為に需要が拡がらぬ、為めに酪農の利益少なく、利益少きが為めに経営者が少ない。之れ等の原因が相俟つて乳が高い原因を成す(中略)酪農経営の困難は、全く売捌きに集中して居る」と述べたように、酪農業にはその生産物である牛乳の需要が伸び悩んでいるという問題があつた。そのため、近藤芳樹が「牛乳考」(『牛乳考・屠畜考』日新堂 明治五年)で「牛牧に遠き所の者は(牛乳を)飲むことをかたしとす。故に美留久といふ物に製して用ゆ。美留久はすなはち練乳なり。其能。生乳に異なることなし。」と述べた保存性の高い練乳の製造が明治初期より試みられていたのである。明治後期になると、北海道では札幌煉乳場(明治四三年創立)・札幌酪農園煉乳所(明治四四年創立)等が相次いで創設された。

大正七、八年頃の八雲町内の畜牛飼育数は約二〇〇頭であつたが、大正一三年には乳牛一一〇六頭となり、昭和五年には二四七六頭に至つた。³⁰⁾ 第一次大戦後乳製品の輸入が再開され、関東大震災後には乳製品の関税が免除された結果安価な外国製乳製品が増加する等乳製品製造に逆風が吹く中、八雲町では北海道煉乳株式会社(昭和二年九月大日本乳製品株式会社社名変更)八雲集乳所設置(大正一一年六月)、同八雲工場開設(大正一二年七月)と着実な歩みを見せたのである。そして乳価引き下げに苦しむ中、昭和七年二月一日には北海道製酪販売組合联合会(以下酪聯)八雲工場

においてバター(31)の製造が開始されたのであった。生産乳の七割が二等乳という問題を抱えていた八雲町の酪農業にとり、バター(31)の製造開始は大きな意味を持つものであったのである。

茂木農場で乳牛の飼育を始めたのは大正八年頃で、玄治郎長男又兵衛が強く推奨したことがきっかけであった。又兵衛は北海道庁種畜場へ自ら赴いて乳牛について学び、その後黒沢（筆者注*柴崎家の小作として小鹿野町より移住）と共に、大正一四年二月一日に製造を開始した森永製菓株式会社空知乳製品工場（空知郡奈井江村）で粉乳・練乳の製造に従事した。

中里では大正一一年に酪農を開始した。大島は中里大蔵の話を次のように記している。

牛を入れたのは、大正十一年で、資金は拓殖銀行から全額借用し、上磯郡の知内村から買ってきた。高いので一〇〇円をちよつと越した。はらみ牛で、中里さんは二才を六〇円で買った。

農会の関係で、大島鍛さんに心配してもらつて畜牛組合などを作り購入したのである。太田正治(32)さんにも世話になり、心配してもらつた。

「畜牛組合」とは、徳川農場の大島鍛農場長が大正九年に農場内の各部落に組織させたものである。酪農業のために新たな借金をすることを渋る農場内の人々に対し、大島が連帯保証人となって北海道拓殖銀行から資金を借り入れ、翌大正一〇年に野田生・大新の各組合が知内村・木古内村から乳牛を共同購入した。茂木農場住民もいずれかの畜牛組合に加入していたと思われる。

茂木農場では、柴崎玄治郎・柴崎義雄（引間光一の兄弟で玄治郎の姉妹と結婚し柴崎姓に）八雲町農業会（昭和一九年四月一日設立認可）において監事を務めた⁽³²⁾・引間新平・引間光一・引間通雄・黒沢・中里の各戸で乳牛を飼育していた。中里・新平・光一は馬車を所有していなかったため鈴木重太郎（国次郎の後継者）宅に牛乳を運び、馬車を所有する玄治郎・義雄・通雄・黒沢と鈴木が輪番で、毎朝八時頃北海道煉乳株式会社八雲集乳所（大正一二年より工場、昭和

七年より酪聯八雲工場へ牛乳を運搬した。ここには、茂木農場が周辺の住民と酪農において連携していた様を見ることが出来る。牛乳を交代で運ぶことは八雲町内で広く行われており、「乳番」とよばれていた³³⁾。鉛川では他に、長谷川・伊藤・柴田の各戸も乳牛を飼育していた。なお寛吾の親族が営む吉田農場は、茂木農場と隣接しているが行き来はできないため移住者が代替わりするにつきあいはなくなり、茂木農場と鈴木³⁴⁾の乳番には参加しなかった。

酪農勃興期の様を、「八雲町酪農史」では次のように描いている。

そうして頑張っているうちに牛が乳を出すようになった。それでも一滴も飲まず全部出荷した。月末毎に現金が入る。月給とりのようだ。牛乳は当番で馬車で運び帰りに空缶を積んでくる。そのうちに空缶の後ろに米一俵を横たえにここに家路に急ぐ風景がみられるようになった。(中略)漸く農家に笑い声が聞かれるようになったのは大正十三年頃からであろうか。全く乳牛に救われたのである。

「月給とり」のように毎月現金収入が得られることは、生活の安定だけではなく満足感にもつながったのであった。これも八雲町の酪農業発展の一因であろう。昭和八年における八雲町内の乳牛は計三〇四〇頭、飼育農家七八三戸、搾乳量は二二四〇石(約四〇〇万リットル)で、酪聯八雲工場の一日の集乳量は九〇石(約一六〇〇リットル)であった³⁵⁾。渡辺侃編・発行『北海道太平洋側の酪農小経営』(昭和一七年)によると、大正一三年、昭和三年、昭和五年に八雲町では飼育乳牛頭数・牛乳産量が急増を見せている³⁶⁾。

昭和九年三月の函館大火の際には、類焼を免れた酪聯函館工場に原料乳を一日一一一五石(一九八〇〜二七〇〇リットル)輸送した他、二カ月に渡り一人一合の牛乳の無料配布を実施した³⁷⁾。また昭和十一年一〇月には鉛川でトリコモナス原虫が発見されたが、道・町の対策の中鉛川住民は一致協力してその撲滅に尽力したのであった。

先に挙げた七戸が、昭和初期における茂木農場の住民であると思われる。図1で各戸の区画を示した³⁸⁾。ただし、昭和六年六月六日に鈴木重太郎外一〇名組合が胆振国山越郡八雲町大字八雲村ペンケルペシペ六〇八番地一七町八反九畝二

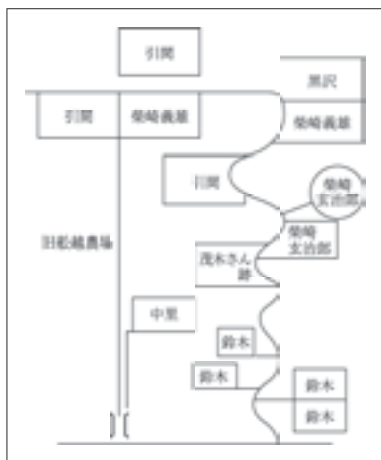


図1 昭和初期 茂木農場内図

三步（約一八ヘクタール）を牧場地として売却を受けた際の組合員に柴崎範次・引間真平・高橋梅吉の名が見られることから（『貸付台帳』）、この七戸以外にも茂木農場関係者が居住していたと思われる。高橋梅吉は明治三十九年に小鹿野町から移住し、聞き取りによると茂木農場を離れていた時期もあるということである。

中里大蔵次男秀男氏によると、この当時の中里家は柱屋根に板壁で、広さは三間×一五間ほどで間仕切りはなかった。暖房は、当初いりりて後にストーブに変わり、こたつに足を入れて寝ることもあった。電気はなくランプで生活した。土地所有者の入れ代わりが相次ぎ、移住者も二三戸から七戸に減じる中、茂木農場住民は酪農業への転換を図り鉛川の人々と協同して肅々と日々の営みを続けたのである。それをなし得た理由は、茂木農場内で一人五町歩の土地を持つことができる魅力にあったと言えよう。札幌農学校生徒狩野時二は『埼玉新報』に連載した「北海道の農況を紹介す」において「我が埼玉県農業者の多くは他の諸県の農業者の如く、多く（五三パーセント）は八反以下の土地を耕し之を

平均するに一戸一町内外の土地を耕作するに過ぎず」（明治三十九年三月二日）と述べているが、山間の小鹿野町や本泉村で農業を営んできた者にとり、五町歩の土地を持つことができるのは夢のようなことであつた。もちろん自分の土地ではないが、先に挙げたように「茂木農場内に自分の土地を持っている」という意識を持てたことが日々の営みの大きな原動力となり、茂木農場を支えたのである。

第四節 牛飼いの木彫り熊

八雲町木彫り熊資料館（八雲町郷土資料館内）の一角には、昭和三年一月に設立された八雲農民美術研究会の会員が制作した木彫り熊が

並んでいる。コロコロとした体形の熊は愛らしく、農作物や家畜、ともすれば開拓者をも食べる獷猛な動物として語られがちな熊のイメージは全くない。制作者自身が楽しんでいたことが何よりも強く伝わって来る作品である。

徳川家開墾試験場では当初より製網・製麻・養蚕・養鶏等の副業を奨励していたが、成果を挙げるには至らなかった。第一次大戦後の澱粉製造の衰退による八雲町の人々の貧困に心を痛めた徳川義親は、大正一〇〜一一年のスイス旅行で見た木彫り熊に八雲再興のヒントを得、見本品を徳川農場に送り冬季の副業として提案したのである。このとき送られたのは熊の置き物だけではなく盆や小鉢・ペーパーナイフ等一三種二八点で、これによりスイスの農民の営みが八雲町の人々に示されたのであった。ロシアの農民の営みに影響を受けた山本鼎が既に大正八年一二月に日本農民美術練習所を長野県小県郡神川村に開設していたが、ヨーロッパの農民の営みに範を取る活動が八雲町にも誕生したのである。

そして徳川農場は、制作活動を促すべく大正一三年三月二六〜二八日に八雲尋常高等小学校において第一回農村美術工芸品評会を開催した。ここには八雲町内外から一〇九七点の出品(うち八雲町内からの出品八六六点)があったが木彫り作品はうち二一点にすぎず、当初より木彫りに関心が持たれていたわけではなかったのである。なお同展には、日本農民美術練習所が公募作品とは別に参考品として出品した他、徳川義親の木彫り熊や義親の妻米子の編み物作品も展示された⁽⁴⁾。そして三日間の会期中、初日一〇〇名以上、最終日二五〇名以上の来場者を迎えたのである。

同展において木彫り作品が高い評価を得たことが、その後の木彫り熊制作の隆盛につながった。「八雲農村美術展^マを見ろ」と題した『函館毎日新聞』の連載(大正一三年三月三〇日〜四月一日 全三回)では、木彫りの部で第一等を受賞した伊藤政雄の作品を次のように評している。

木彫りには同町砂蘭部の伊藤政治氏^マが刻んだ「熊」をはじめとし「狸^{まみ}」や「稻荷」「お雛様」「マキリの柄」「箸」などあるが、これらは長野農民美術研究所^マあたりの作品を参考にすれば「立派な農民美術」としてそれこそ田園生活者の趣味向上に新しい光りを与へるものがある様に思はれた。山本鼎氏等の提唱する「農民美術」の焦点はこの辺

にあるらしいから、農村の青年は開拓すべき「我等が芸術」をこれらに見出さなければならぬと思つた。

（三月三一日）

ここから、「農民美術」という新しい営みが既に知られており、木彫り品にその可能性が見出され注目を集めていたことがわかる。同展に伊藤が出品した作品を現在八雲町木彫り熊資料館で見ることができ、徳川義親が提供したスイスの木彫り熊と瓜二つと言っても過言ではなく、見本品に忠実に作品を制作した点に木彫りを学ぼうとする熱意を見ることができる。『改訂八雲町史』では「木彫りぐまやこれを装飾用にあしらった工芸品が最も好評を博し、売れ行きも良かったので、自然に木彫りぐまの制作が中心とな⁽⁴³⁾ったとしている。また大石勇は『伝統工芸の創生』で「すでに『熊狩りの殿様』として知られていた徳川義親の名声をうまく利用⁽⁴⁴⁾したとしている。しかし当初伊藤が木彫り熊を制作したことが与えた影響は小さくなかつたと思われる。そして酪農業勃興期の八雲町において、先行き不安な中「農民美術」という副業に多くの人々が関心を抱いたのであつた。また生業の転換期だからこそ進取の気風に満ちていたことも、木彫り作品の制作が注目された一因として挙げられよう。そして同年十一月の第一回木彫り講習会開催を見たのであつた。翌大正一四年にも徳川義親は見本となる木彫り品を大量に提供し、その後見本となる熊の飼育も開始した。徳川義親は『私の履歴書』で、「モデルの熊はおりの中で、食つては寝、食つては寝しているものだから、作品の方もぶくぶく太った熊ばかりになった⁽⁴⁵⁾」と述べているが、「太った熊」は八雲の木彫り熊の愛らしさの一因でもあろうかと思う。

そして伊藤が昭和二年に秋田県で開催された北海道奥羽六県連合副業共進会において第一等を獲得したことに触発された人々により、翌昭和三年一月に八雲農民美術研究会が結成されたのであつた。⁽⁴⁶⁾同会の名称には、農民美術の担い手たらんとの思いを見ることができる。同年七月一八〇二二日に国民新聞社が銀座松屋で開催した全国農村手工芸展覧会では、同会が出品した「熊彫及ペーパーナイフ」が入賞したのみならず、「入賞品の中（中略）北海道八雲の熊彫人形（中略）等二度と東京の得難いと云はれる珍品揃い⁽⁴⁷⁾」と記事に特筆された。このような評価は、研究会の更なる活動を促す

原動力となったのである。

伊藤については、都築省三が『村の創業』（実業之日本社 大正六年）で次のように述べている。

伊藤政雄さんは、殆んど八雲村創業以来の小学校校長伊藤直太郎先生の弟である。伊藤先生の土地が大新にあつたので政雄さんはそこで農業に従事してゐた。政雄さんは頗る温厚な君子人だ。

（中略）

この政雄さんは大島さんを助けて昔神農氏がその民に農耕を教へたやうに近隣の農民に新しい農業を説いた。それから昼、野に働いて疲れた体を、夜、夜学に運んで農民の子に文字を教へた。政雄さんの畑は農事試験場のやうに畦毎に札がづくぐと立つてゐた。政雄さんの家には牛や、馬や、鶏や、豚や、山羊やがごたぐと同居してゐた。彼はそれをも皆子供のやうに取扱つた。⁽⁴⁸⁾

「君子人」の如く温厚で「新しい農業」のみならず「文字」をも教える伊藤を師と慕う人は大勢いたと思われ、木彫り作品の制作が隆盛を見せた一因はここにある。

八雲農民美術研究会では、熊だけではなくフォークやスプーン、ペーパーナイフ、茶たぐや盆等の木彫り品の制作も行った。同会は毎月一五日に例会を開催して作品の発表・批評などを行い、伊藤の他に東京で日本画を学んだ後大関尋常小学校付属夏路特別教授場で教員をしていた寒山十倉兼行が指導にあたつた。竹沢美千子は『木霊の再生——柴崎熊の魅力を探る』（文芸社 平成一四年）で、茂木農場の中里伊三郎の作品が十倉の指導に忠実に制作されたものであることを指摘している。⁽⁴⁹⁾ また昭和七年七月には山本鼎にも指導を仰いだ。

制作された作品は、会員の手により札幌・小樽・函館などの道内の各都市だけではなく、東京・名古屋・京都・大阪等でも販売され、会員の生計を補助する副業として成立したのであつた。昭和七年には五三三七点制作し、八五四〇円を売り上げている。⁽⁵⁰⁾

子どもの頃から彫刻に興味を持っていた柴崎重行は、第一回木彫り講習会から参加し（当時一九歳）、「熊のマスク」（昭和五年）・「牛のトルソー」（六年）で道展に連続入賞を果たした。重行はともすればその芸術家気質が強調されがちであるが、茂木農場の日々の営みに励む酪農家であつたことを忘れてはならない。『o Beat（昭和六三年八雲町勢要覧）』に掲載された「塊を彫り出す 魂を彫り出す」で重行は、酪農の傍ら木彫り熊の制作を続けるうちに起きた心境の変化を次のように語っている。

ムンクの絵の中にある、哲学的なもの、根源的なものにひかれた。このころから私は八雲農民美術研究会から遠ざかっていくようになったんです。そして二人（筆者注*重行と根本土龍）で、北欧に渡ろうということになり、そのことを親父に話したんです。

（中略）

ところが、渡航準備を進めている最中、あとを継がせる弟が病気になった。「せっかくの希望だからなんとか行かせたいんだが、なんとか家をやってくれないか」と親父に言われました。親父のせつない気持ちは私にも伝わりました。親父の気持ちをふりきって芸術の道にいけるようなタイプではないんです。（中略）

愚痴を言うまい、後悔はしましい、と心の整理をつけるために自分に取っ組みしました。牛を飼っても彫刻はできません。できなければ本物じゃないと言ひ聞かせました。ですから、後悔は一切ありません。一方の根本も戦争の影響で、結局行けなかったんですが。

この頃、私は貧乏百姓でしたから、たくましい青年をモデルにした胸像や種牛をモチーフにした作品も作っていました。今考えると、現在の熊の基礎になっているんだと思う。

このときも徳川さんから武者小路実篤の『新しき村』に行かないかと徳川^マさんに盛んに勧められたり、フランスの有名な美術評論家ジャック・リユクルと知り合い、認められ、誘われたときも心が揺れた。おかしいかもしれま

せんが、認められれば認められるほど、ここにしようという決意が固まってきた。

それから再び作り始めたのはいつごろだろう。子供もある程度大きくなって、こづかい稼ぎにと始めたのは、ずいぶん後のこと。

重行は、「哲学的」なものに引かれて独自の世界に入り、洋行計画が頓挫した後は「牛を飼」う日々の営みの中で彫刻作品を生み出すことへのこだわりを強めていったのであった。「八雲農民美術研究会から遠ざかっていくようになった」理由を、浅尾一夫「撓り彫りに魅せられて——大地に根ざした手斧の力業」(『北海道新聞』昭和五六年九月一四日)・竹沢前掲書は共に、根本の影響を受ける中「毛を一本一本彫るような細密彫りに疑問を感じるようになった」ことを挙げている。山本鼎は『美術家の欠伸』(アルス 大正一〇年)で「今日一切の美術が墮落して居るのは、要するに模擬を習慣とした結果である。」と述べているが、重行も「模擬」に疑問を感じるようになり伊藤・十倉らの指導を卒業したのであった。また武者小路実篤が宮崎県児湯郡木城村に「新しき村」を開いたのは大正七年で、昭和一四年に埼玉県入間郡毛呂山町へ移転しているが、徳川義親は農村における芸術活動という共通点を以て「新しき村」を勧めたのであろう。重行は、共に留学を試みた根本に西洋美術の感化を得、また更科源蔵の知遇を得る等、広く学びつつ、「牛を飼」う彫刻家として歩んだのであった。ただし、管見の限りでは「茂木農場監督人柴崎重行」という記述はない。昭和一四年に玄治郎が逝去し、重行は木彫り作品「父の像」(写真1 八雲町郷土資料館所蔵 筆者撮影)を残している。

また「貧乏百姓」故に彫刻の制作に励み、「こづかい稼ぎ」のために彫刻を再開したことを記しているが、副業により生活を豊かにせんとする農民美術の体現者に他ならない。収入に繋がる重行の技術も看過してはならないだろう。そして息子宏明が「私共の子供の頃の父は農事組合やPTAの仕事で出歩く事が多く(中略)お祭りには子供達と川へ遊びに行き(中略)彫刻を中止して居た父が、熊彫を始めたのは、私が中学生になってから(筆者注*昭和二〇年代後半⁵³)」と記したように、重行は父親として農場経営者として地に足をつけた日々を送っていたのであった。このような姿勢な

くして茂木農場の存続はあり得ず、また後年木彫り熊の制作を再開し得た一因はここにある。

茂木農場出身の他の木彫り熊作家については省略するが、リーダー的存在であった重行の日々の営みを大切に作る姿勢が与えた影響は少なくないと思われる。そして安定した農場の営みから生まれる心の余裕が、木彫り熊の趣に富んだ表情を生んだのではないだろうか。作り手によって熊の表情が全く異なることも、木彫り熊制作者、そして八雲町の酪農者・農業者の自由な雰囲気を表しているように思われるのである。

木彫り熊誕生期は、八雲町の酪農業導入期と重なる。木彫り熊誕生の契機となった農村美術工芸品評会開催趣意書において、「田園生活趣味ノ鼓吹」の「一法トシテ副業的農村美術工芸品ノ奨励」をなすことを旨とすると述べられているが、茂木農場の営みは木彫り熊の制作により得た「田園生活趣味」を心の支えとし新たな展開を見せたのであった。

注

- (1) 『粗悪移記閉鎖(8)鉛川①』、日付は登記受付日 函館地方法務局八雲支局所蔵
- (2) 『北海道移民政策史』 三三四頁
- (3) 『武蔵国児玉郡誌』 四五頁



写真1 柴崎重行作「父の像」

- (4) 『武蔵国児玉郡誌』 一七五～一七八頁
- (5) 岡部栄信著 『山口太三郎翁の面影』 岡部栄信 大正十一年 三七頁
- (6) 『目名町郷土史』 二三、九八頁
- (7) 『八雲新報』 昭和五年一月一五日
- (8) 『沿革誌』 には「山中」と記述されている
- (9) 秋山専蔵編 『上は国母より』 興国社 大正十一年 緒言より
- (10) 『道南民報』 昭和三年二月一七日
- (11) 五十嵐栄吉編 『大正人名事典』 第一巻 東洋新報社 大正三年 一九〇三頁
- (12) 茂木農場周辺の土地を函館で海運業を営む宮本武之助が大正末期に購入しており、八雲が海運業者に注目されていたことがわかる
- (13) 井関九郎 『現代防長人物史』 発展社 大正六年 一五頁
- (14) 『現代防長人物史』 一六頁
- (15) 「私立学校設立認可申請書」より 東京都公文書館所蔵
- (16) 『土地台帳(8)鉛川1～終』 函館地方事務局八雲支局所蔵
- (17) 八雲町史編さん委員会編 『改訂八雲町史』 上巻 昭和五九年 四五三～四五四頁
- (18) 『改訂八雲町史』 上巻 四〇二～四〇五頁
- (19) 『殖民公報』 第二四号 明治三八年一月二八日
- (20) でんぶん製造量は明治三六年…一九四〇、四七五斤、三七年…一、二三八、九三〇斤、三八年…一、六二一、九二五斤、三九年…一、七四二、七五五斤(『ゆうらふ』 第一七号 昭和五九年七月一日)
- (21) 北海道立総合経済研究所編 『北海道農業発達史』 上巻 北海道立総合経済研究所 昭和三八年 四六五頁
- (22) 『改訂八雲町史』 上巻 四〇六～四〇九頁

- (23) 八雲郷土史研究会編『八雲郷土史年表』昭和二十七年 二一頁
- (24) 「八雲に於ける馬鈴薯立毛品評会に就て（統）」『農友』第三三卷第一〇号 昭和六年一〇月二五日
- (25) 「茂木農場と中里大蔵少年」
- (26) 『農の人生』五五頁
- (27) 『北海道農場調査』三六四～三六七頁
- (28) 横井時敬『畜産経済』子安農園出版部 大正九年 一二四～一二五頁
- (29) 近藤芳樹「牛乳考」『牛乳考・屠畜考』日新堂 明治五年 一頁
- (30) 『改訂八雲町史』上巻 四一九～四二〇頁
- (31) 八雲町農協四十年史編集委員会編『八雲町農業協同組合四十年史』八雲町農業協同組合 平成三年 三六頁
- (32) 『改訂八雲町史』上巻 五三一頁
- (33) 「八雲町酪農史」『ゆうらふ』第八号 昭和四十六年十二月一日
- (34) 八雲町編『三訂八雲町史』上巻 八雲町 四七八頁
- (35) 松本辰雄『創立二十周年紀念明治製菓株式会社二十年史』明治製菓株式会社 昭和十一年 二二頁
- (36) 渡辺侃『北海道太平洋側の酪農小経営』渡辺侃 昭和一七年 六一～六三頁
- (37) 黒沢西蔵「私の履歴書」『私の履歴書』経済人17 日本経済新聞社 昭和五六年 一九三頁
- (38) 複数の関係者に聞き取りを行った結果、若干の齟齬が見られた
- (39) 大石勇『伝統工芸の創生——北海道八雲町の「熊彫」と徳川義親』吉川弘文館 平成六年 一二～一三頁
- (40) 『伝統工芸の創生』五六～五七頁
- (41) 『伝統工芸の創生』四三頁、『函館毎日新聞』大正一三年四月一日
- (42) 『伝統工芸の創生』五六頁
- (43) 八雲町史編さん委員会編『改訂八雲町史』下巻 昭和五九年 四三八頁

- (44) 『伝統工芸の創生』 一六頁
- (45) 徳川義親「私の履歴書」『私の履歴書』 文化人16 日本経済新聞社 昭和五九年 一〇九頁
- (46) 『読売新聞』 昭和五一年一〇月七日
- (47) 『国民新聞』 昭和三年七月一八日
- (48) 都築省三「村の創業」実業之日本社 大正六年 三一九〜三二〇頁
- (49) 竹沢美千子「木霊の再生——柴崎熊の魅力を探る」文芸社 平成一四年 六五頁
- (50) 八雲町郷土資料館『木彫熊と八雲農民美術研究会』八雲町郷土資料館 昭和五三年 九頁
- (51) 『北海道新聞』 昭和五六年九月一四日
- (52) 山本鼎「美術家の欠伸」アルス 大正一〇年 一六三頁
- (53) 柴崎宏明「父・柴崎重行について」『なまもないミニコミ誌』 第一八号 平成三年一一月
- (54) 『伝統工芸の創生』 九頁

第三章 新天地斗南丘

第一節 酪農業の曲がり角

八雲町の酪農業は発展の途をたどり、昭和一四年には町内の乳牛数三四九四頭、飼育戸数八三五戸を数え、一戸平均の乳牛飼育数は四・二頭となった。⁽¹⁾『北海道太平洋側の酪農小経営』は、八雲町で五頭以上乳牛を飼育する酪農家が、昭和一三年には二四四戸であったのが昭和一五年には六八四戸に急増し、専業の酪農家が多いことを指摘している。⁽²⁾飼育数一、二頭といった小規模酪農家は不況になると乳牛を手放す傾向があるが、飼育頭数が多い酪農家は酪農を継続するため、酪農業全体の発展につながるのである。そして昭和一六年には全町の乳牛飼育数は三六二三頭となったが、その

後は衰退を見ることがなった。原因は、米・麦・イモ類への転作による飼料畑の不足、応召や軍需工場への徴用等による労働力の減少、耕地の荒廃等による乳牛管理の困難等で、飼育頭数を減少する酪農家が増加し、昭和一八年には八雲町内の乳牛飼育数は三〇〇頭を割り込んだのである。³飼料の配給統制は昭和一四年に既に始まっていた。

一方で、牛乳や乳製品への認識が高まってもいた。昭和九年三月一九日の貴族院請願委員会第一分科会において人造バターにより「酪農民ヲ窮境ニ陥ルニ至リ、斯クテハ農村更生ノ目的ヲ破壊スル」ことが懸念されたように、牛乳及び乳製品の生産・製造は「農村更正」の術ととらえられていたのである。また牛乳や乳製品の栄養価の高さは戦時色が濃くなるに従い重要度を増し、練乳やバターには輸出による外貨獲得も期待されていた。さらに接着剤等に使われるカゼインの原料脱脂粉乳は九五%を輸入に依存するという状況にあったため、自給が課題となっていたのである。⁵

このような中青森県は冷害に強い酪農業に着目し、その振興を図るべく同県畜産課は昭和一四年に北海道庁畜産課より小崎将を招聘した。そして小崎は、空知郡滝川町に続き勇払郡安平村遠朝の開拓を成功させた富樫鉄之助を上田誠一知事に推薦したのである。小崎は富樫が遠浅開拓を申請した際の北海道庁の担当者で、富樫とは旧知の間柄であった。そして県の依頼により開拓地の視察を行った富樫は、青森県下北郡田名部町大字田名部字斗南岡及び字内田を新たな酪農業の地として選定したのである。ここで富樫が選んだのは、明治三年に旧会津藩が斗南藩となり藩庁を設けて開拓を行った斗南ヶ丘に隣接する地域で、旧会津藩士が新天地下北にかけた思いを汲み取り、富樫は選定した地を斗南丘と名づけた。

笹澤善八編・発行『大湊町誌』（昭和一〇年）によると、田名部村では享保年間に「交通運輸」用の馬五二頭・牛三〇五頭、明治二三年には馬九七頭・牛七六一頭が放牧されており、⁶同地が牛馬飼育の適地であったことがわかる。長年の牛馬の放牧により土地が痩せていたが、乳牛の飼育により沃野へ変貌することが期待された。

斗南丘酪農集団と名づけられた開拓地は、田名部町有地約七〇〇町歩のうち四一五町歩余り（南北三六〇〇メートル、

東西一四〇〇メートル)を買収して開設され、内約三〇〇町歩を一戸当たり一五町歩(約一五ヘクタール)とし、北海道の酪農経験者二〇戸が移住することとなった。総事業費一、〇三一、五五二円で、その六割を国と県、四割を移住者負担とし、移住者一戸あたりの負担額は約二五〇〇〇円であった。富樫は団長として開拓の指揮を取ることとなり、また各戸の乳牛飼育数一五頭を目標とした。⁷⁾

地元農家を受け入れない一方で北海道から二〇戸も募集することや一戸当たり一五町歩という広さへの反発が強かったが、今後の模範となる酪農業を二〇戸という数を以て成し遂げるべきであり、運営上獣医やトラクター運転手・鍛冶屋等も必要であるとの富樫の考えに基づき各方面への説得がなされた。また、「地元の方々は体に依る作業が大部分で有り我々(筆者注*北海道の酪農家)は馬に依る作業が主で、経営面積で桁違いの為に理解して貰えず」⁸⁾、「馬は馬頭観音さまで神様で(農作業に)使うべきものではない」といったような田名部の人々との考え方の違いも受け入れに難色が表示された一因である。戦時下故牛より馬を買うべしとの意見も強硬であった。

用地の買収については、青森県から田名部町への働きかけもあり、町有地の売却により資金を得て田名部町立田名部中学校を設立することで決着を見た。昭和一六年四月一日に同校夜間部が開設され、同年一二月二〇日に青森県田名部中学校となった。なお同校生徒は、昭和一八、九年に勤労奉仕として斗南丘酪農集団の開拓作業に加わっている。

一方、「その当時一家の生計が大体六百円から少し上流の人で千円程度」であった北海道の酪農家にとり一戸あたり約二五〇〇〇円の負担金は厳しく、そのために移住を断念する酪農家が続出した。富樫に直接声をかけられ、小崎から「県の方としてもどうしてもしなければならぬ。(中略)決して食へないようなことはしないからと、とに角くる丈来てくれ」⁹⁾と強く説得された移住者も少なくなかった。しかし「戦争は次第に激しく明日にも召集令状が来るやも計り難く」¹⁰⁾という状況下での移住は容易ではなかったのである。

このような中、茂木蔵六は斗南丘を目指す決断をしたのであった(移住時四〇歳)。

第二節 茂木農場再興

蔵六は昭和一八年五月六日に耕馬を伴い単身斗南丘入りし、妻つるの他家族は昭和一八年九月六日に斗南丘に入った。^⑪蔵六が約二五〇〇〇円の負担金を捻出した方途であるが、『土地台帳^⑫鉛川一〇終』では、昭和一二年一月二日付で所有者が吉田一から茂木蔵六になり、昭和二〇年四月一二日に水野秀三郎（山越郡八雲町大字八雲村字砂蘭部無番地）に再度変更されている土地が存在しているのが確認される（日付は登記受付日）。斗南丘に土地を取得するにあたり、蔵六はこの土地を水野に売却したのではないかと思われる。なお昭和一二年には他に、吉田一から茂木農場の引間通雄への所有者名義の変更も見られる。

八雲町から斗南丘酪農集団へは、蔵六他二戸が移住した。斗南丘酪農集団全二〇戸のうち、遠浅開拓地を擁する安平村からの移住七戸が最多で、八雲町からの三戸は川畑牧場を擁する北見市五戸に続く。そして町村牧場（江別町）の酪農家や牛馬の飼育に実績を持つ酪農家も斗南丘をめざした。安平村と八雲町からの移住者は、富樫の推挙によった。^⑬蔵六は、酪農業のさかんな八雲町の出身であることに加え、田下農場での経験が買われたのではないかと推測する。全二〇戸にはトラクター運転手・専属鍛冶屋・獣医も含まれ、大半が八頭前後の乳牛を伴っての移住で、その合計は乳牛一四一頭、耕馬五二頭であった。^⑭

斗南丘酪農集団の二〇に分けられた区画は「〇号地」とよばれ、昭和一七年九月初頭に二号地に五間×一五間の小屋が建てられ開拓作業の拠点となった。内部はムシロにより各戸毎に区切られ、炊事や風呂（ドラム缶を使用）は共同で、収穫した小麦でパンを焼き牛乳を飲んで食事とすることもあった。また建立には至らなかったが、当初は神社の造営も計画されていた。^⑮

昭和一八年のうちに一二戸が移住を完了し、二号地で共同生活を行いながら同年には約一〇〇町歩の耕地に小麦・菜種・馬鈴薯・燕麦・蕪類・牧草等の作付けを行い、^⑯各戸には住宅（木造平屋建て）・サイロ・堆肥場等を建設した。そし

て昭和一八年秋に、富樫と小崎が抽選により各戸の入居地を決定したのである。⁽¹⁶⁾ 蔵六は一七号地に入ることとなった。茂木農場の再興である。

その後各戸の牛が斗南丘入りしたが、貨車の確保が容易ではなく、乳牛の輸送は困難を伴った。また牛の飼料となる牧草の確保が必要となったため、昭和一八年七月に富樫は樺山飛行場(田名部町樺山)の草刈を申請し、許可された。このような中昭和一九年九月までに計二四〇町歩の作付けを終え、予定より一年三カ月早い同年一〇月二八日に竣工式を挙行したのである。⁽¹⁷⁾

酪農業において大切なのは、牛乳の販路である。斗南丘酪農集団の開設にあたり富樫は当初より牛乳の販路を意識し、森永乳業株式会社に製乳工場建設を要請していた。⁽¹⁷⁾ 遠浅が森永乳業空知工場の管内にあったことが、富樫が森永乳業に着目した理由である。しかし山田青森県知事の肝煎りにより全国購買組合連合会(昭和一八年九月三〇日より全国農業経済会)が田名部駅(現赤川駅)前に製酪工場を開設することとなり、斗南丘酪農集団竣工式に合わせて昭和一九年一〇月二八日に起工式・地鎮祭を挙行した。なおこれに先立ち、昭和一八年九月に大湊町の熊谷牛乳店に牛乳の処理を一升一錢五厘で委託し販売を開始した他、⁽¹⁸⁾ 工場敷地内の仮工場ではカゼインを製造することとした。製酪工場は昭和一九年一〇月より南部三郡・上北・下北・三戸地域の集乳を開始したが、空襲が日増しに激しくなる中、空襲の標的となることを避けるため木の枝で覆った馬車により牛乳の運搬が行われた。

一方、飼料の乏しさから放牧したところピロプラズマにより昭和一九年には牛が二〇頭、更に二〇年・二一年には各四五頭が死亡し計九八頭に激減するという被害にも見舞われた。⁽¹⁹⁾ この間応召する移住者が相次ぎ、また開拓を断念し入れ替わった移住者もいた。しかしこのような中斗南丘酪農集団は、昭和一九年には馬鈴薯四〇〇〇俵、麦類五〇〇俵、トウモロコシ二五万貫(約九四万キロ)、燕麦五〇〇俵を生産したのである。⁽²⁰⁾ また茂木つるのは緬羊を飼育し糸をつむいだ。田下農場では昭和一四年に田下緬羊種付所を開設しており、その経験を生かしたものであったと思われる。⁽²¹⁾

斗南丘酪農集団の乳牛の頭数は昭和二十七年に当初の状態に戻り、一戸平均の乳牛が昭和三十六年には二〇頭、四八年には六〇頭となった²²⁾。また昭和四〇年代には、農業関連の各賞を受賞している²³⁾。

第三節 墳墓の地

斗南丘酪農集団一帯は、防風林に仕切られていながらも広大な土地が広がり、山間にある鉛川よりよほど北海道らしい景観が見られると言っても過言ではないだろう。この一七号地では、蔵六長男瑞男が現在も酪農を営んでいる。斗南丘酪農集団は離農者を出さないことで知られ、現在も二〇戸により構成されている。

昭和四十七年五月二八日に蔵六は真宗大谷派徳玄寺（むつ市新町）に茂木家の墓を建立し、さらに昭和五十一年五月一日には小鹿野町にある茂木家の墓の改修を行った。寛吾と妻はまは小鹿野町の墓所に葬られ、徳玄寺には精一と妻ちか、そして現在は蔵六・つるの夫妻も眠っている。なお、斗南丘酪農集団全二〇戸のうち七戸が徳玄寺の檀家である。

墓の建立・改修を行った理由を、蔵六次男紀久男氏は筆者に対し「ゆとりができたから」と語った。墓の建立には費用もかかり、開拓の成功が見えない中で墓所を定めることは現実的ではない。子どもが独立し生活が安定したところで、「骨を埋める」ことと向き合ったのであった。

蔵六が徳玄寺に墓を建立したのは、八雲時代より懇意にしていた小寺家が徳玄寺の檀家であったことによる。小鹿野町の茂木家は曹洞宗鳳林寺、妻はまの実家は真言宗十輪寺の檀家で、八雲にて没した寛吾は曹洞宗遊国寺（八雲町本町）に葬られ、はま・精一も同様であったと思われる。茂木農場住民もその多くが遊国寺を墓所とした。しかしながら斗南丘では宗派にこだわらず縁のある寺院に墓所を定め、斗南丘と関わりのない寛吾・はまは郷里小鹿野町に葬ったのであった。なお小鹿野町の茂木家を引き継いだ旧姓柴崎只吉及びその親族の墓所は、小鹿野町内の別の場所に設けられている。

また蔵六の本籍地が終生小鹿野町のままであったことから寛吾夫妻・精一夫妻もそうであったと思われるが、蔵六の

子どもはそれぞれの結婚にあたり本籍地を変更した。ここからも、移住地に根を下ろすということが極めて現実的にとらえられていることがわかる。

茂木農場再興後、戦争の終結もあつて親族の往来が活発になり、岐阜県土岐市に居住していた寛吾次女利久がしばしば茂木家を訪れるようになった。兄精一は既に亡く、兄嫁かちや甥の蔵六に会いに来るのであるが、茂木家には寛吾らの位牌があることもあり「実家に帰って来るような感じ」(茂木紀久男氏)で、趣味の俳句の話をよくしていたという。利久の姉淑女の来訪はなかったが淑女の息子が訪れたことはあり、「茂木の本家」ととらえられていたのであつた。ここにも、茂木家が斗南丘に根を下ろした様を見てとることができる。

斗南丘酪農農業協同組合編・発行『斗南丘酪農40年のあゆみ』(昭和五七年)によると、斗南丘への移住の理由は「現在地は立地条件が良くない」(三号地青木重美 安平村より移住)・「六町そこそこの土地では狭過ぎて行詰った」(二〇号地三島京一 北見市より移住)ことであつた。そして三島が「心の支えとなつたのは十五町近くの土地を得られたこととした。どんなに痩せていても土地は人の力で肥す事ができる。」²³⁾と述べたように、一五町歩という広さは大なる魅力を放つたのである。紀久男氏によると蔵六が斗南丘を目指した理由を口にするとはなかったが、同様の理由であつたのではないかと推測される。そして何より、酪農業の模範を示す存在としての移住が、開拓の原動力となつたのではないだろうか。

また斗南丘酪農集団では牛乳の販売や宅配も行っていたが、贅沢品とされた牛乳を扱うことへの自負心も酪農業の支えとなつたと思われる。戦後の食糧難と言われた時期においても、斗南丘酪農集団では米を食べなくとも食べ物に困ることはなく、子ども達は貴重品とされた牛乳をサイダービンに詰めて新聞紙やにんじんでふたをし学校へ持つて行くこともあつた。このような「豊かさ」を経験したことも、日々の営みの力となつたのであろう。

宮本常一は斗南丘酪農集団について、「下北の野に楽土を建設しようとした会津人たちの夢も、およそ一〇〇年後、

漸く実現しようとしているのである。⁽²⁴⁾と述べている。下北の人々にとり斗南藩が置かれたことは誇るべき歴史であり、現地における聞き取り調査においても、「楽土を建設」する「会津人の夢」の後継者たる自負は確かに感じられた。しかし一方で筆者は、酪農の手腕を買われ確たる生計の手段を持って移住した点に、旧会津藩士との明確な違いが認識されていることを感じずにはいられなかったのである。

第四節 農場の守り神

最後に、八雲町の茂木農場のその後にふれておきたい。

前述したように茂木農場は昭和九年に北海道拓殖銀行に渡った後、茂木農場住民に分割された。『土地台帳(18)鉛川1』終』には、柴崎重行・柴崎義雄・黒沢修造・引間睦郎・引間光一・中里大蔵らの名を所有者として見ることができ、登記受付日は昭和二年九月一日となっているものが多いが、中里大蔵は「拓殖銀行行^マからは自作になるために買った。測量をして境界に杭を入れたのは、昭和十九年七月十八日で、この日にお祝いをした。」⁽²⁵⁾と語っており、蔵六が斗南丘で一七号地を取得したことに触発されたのではないかと思われる。そしてほとんどの土地が昭和三〇年代に柴崎宏明名義に変更され、前所有者は離農し一部は八雲町を離れた。なお、蔵六が水野秀三郎に売却した土地は、昭和二七年に前田正一への名義変更が行われている。

柴崎宏明は昭和三〇年代に父重行から農場の業務を引き継ぎ、多い時で三〇頭ほどの乳牛を飼育していた。昭和四〇年代半ばの茂木農場を、大島は次のように描いている。

学校前から一籽位もゆくと緑の牧野が開け、樹木が点々と繁つている中に、近代的な新しい牛舎がみえる。二十五頭も入る位の駒型屋根で赤く塗られているのが緑と対^マ象^マ的で美しい。この牛舎の主任は息^マさん^マの宏明君である。

木立ちのむこうに、これも近代的なきれいな住宅が立^マつ^マっている。前庭は広く美しい花が沢山咲き乱れている。奥

さんのときさんがお花畑の主任である。つき山もあり庭木もある。玄関先きには名石が沢山おかれている。みとれ
ていると後にワン公がきていて人なつくく寄つてくる。

茂木農場で唯一酪農業を続けている柴崎の様を大島は牧歌的に描いており、田園の光景を見ることが出来る。しかし
鉛川のこの地で酪農業を営むのは容易なことではなかったのであった。高台にある茂木農場は水の便が悪いのである。
また冬期の飼料の確保も困難であることから、昭和五〇年代に肉牛の飼育に切り替えた。しかし開発公社の支援が得ら
れず、また牛肉は価格の変動が大きいこともあり五年ほどで撤退し、その後は牧草の栽培に移行した。

酪農業に不可欠な牧草栽培であるが、柴崎宏明氏によると牧草栽培は茂木農場の地形・気候には不向きであるという。
牧草の収穫は六、七月であるが、この時期は雨が多く霧もかかり、気温も低いことがその理由である。雨や霧は牧草の
乾燥の妨げとなる。また高台にあるため地味も豊かではない。それでも畑作よりは安定しているため牧草栽培をしてい
たが、昭和六〇年ごろ離農した。現在旧農場内に居住しているのは氏の世帯のみである。

柴崎家においても、昭和四〇年代に墓の建立が行われた。農場の業務は既に息子宏明に引き継いでいたが、重行は昭
和四六年九月に落款の「志」を刻んだ墓石を建立した。ここには玄治郎他北海道で生きた柴崎家の人々が眠っている。

茂木農場が制作者を輩出した木彫り熊は、現在は制作が行われていない。木彫り熊の制作のみで生計を立てるのは難
しいことが制作者途絶の要因であるが、そもそも副業として始められたものであり、それを以て生計を立て得ないとす
るのは木彫り熊制作の志が受け継がれていないと言うべきであろう。木彫り熊の魅力は酪農業で日々乳牛と接し動物に
愛情を注ぐ者にこそ表現し得るものであり、日々の営みをなしつつ農民芸術の体現者たらんと志を持つ者こそその制
作の担い手にふさわしいと言えるのではないだろうか。

茂木農場を見守り続けてきた柴崎の区画のおんこの木は、昭和三五年に茂木農場から姿を消した。樹齢八五〇年を超
えるこの木は空洞が大きくなり枝も枯れてきたため、重行が切らせたのである。そして幹は数十体の木彫り熊に、切り

株は重行の作業台に生まれ変わった。「人間の生命のはかなさに比べ、八百五十年の間、大地にしがみついて生きてきたこの樹の木魂に合掌し」⁽²⁶⁾このようにしたと重行は語っているが、これにより茂木農場の守り神は新たな生命を吹き込まれたのである。

注

- (1) 『改訂八雲町史』上巻 四二七頁
- (2) 『北海道太平洋側の酪農小経営』 六一頁
- (3) 『改訂八雲町史』上巻 四二八〜四二九頁
- (4) 「第六十五回帝国議会貴族院請願委員会第一分科会議事速記録第六号
- (5) 『私の履歴書』経済人17 一九二頁
- (6) 笹澤善八編『大湊町誌』笹澤善八 昭和一〇年 一二三頁
- (7) 斗南丘酪農農業協同組合編『斗南丘酪農30年の歩み』斗南丘酪農農業協同組合編 昭和四七年 六〇八頁
- (8) 斗南丘酪農農業協同組合編『斗南丘酪農40年のあゆみ』斗南丘酪農農業協同組合 昭和五七年 三一頁
- (9) 『斗南丘酪農40年のあゆみ』 二二二頁
- (10) 『斗南丘酪農40年のあゆみ』 三二二頁
- (11) 『斗南丘酪農30年の歩み』 一七、二二二頁
- (12) 『協同組合奨励研究報告』 八五頁
- (13) 前田哲男「下北文化誌19」『東奥日報』昭和六〇年九月三〇日
- (14) 『普及員と酪農開拓』一六五頁、前田哲男「斗南丘酪農余話」『うそり』第二四号 昭和六二年
- (15) 『斗南丘酪農40年のあゆみ』 三八頁

- (16) 『斗南丘酪農40年のあゆみ』 三五頁
- (17) 『普及員と酪農開拓』 一二六頁
- (18) 『普及員と酪農開拓』 一七一頁
- (19) 『協同組合奨励研究報告』 八八頁
- (20) 『協同組合奨励研究報告』 八七頁
- (21) 『目名町郷土史』 三二頁
- (22) 田辺良則「37年間離農者を出さなかった酪農村〈青森・斗南丘〉(中)むくわれた努力——成長の時代」『あすの農村』昭和五
五年五月
- (23) 『斗南丘酪農40年のあゆみ』 三九〜四一頁
- (24) 宮本常一『私の日本地図3 下北半島』 未来社 平成二三年 八〇頁
- (25) 「茂木農場と中里大蔵少年」
- (26) 『北海道新聞』昭和五十六年九月一四日

終 章

茂木農場の足跡から、明治後期より戦前期における北海道移住者について以下の点を指摘したい。

まず、一族・一家を挙げて移住地の開拓に従事するのではなく、移住後勤め人や他家の小作人等になる者が見られることである。他所で給金等を得ることは、移住地の開拓の一助となる。そして子どもが成長した後も貧困を防止するため土地の分割を行わないことは、必然的に移住地からの転出を促した。当初の移住地を離れることは開拓の進展と逆行することととらえられがちであるが、移住地を離れた者が開拓を支えるという営みが見られたのである。茂木精一夫妻

の田下農場での働きや柴崎又兵衛による酪農の導入などは、この例として挙げることができる。なお茂木農場は埼玉県児玉郡本泉村・同県秩父郡小鹿野町からの移住者が多いが、茂木農場を離れた営みを可能にした背景には地縁による結束の強さがあつたと思われる。

また北海道移住にあたり姓名を変更する例はしばしば見られるが、旧姓の存続を図ったうえで新たな姓を名乗ることは、新天地で生きることへの強い思いの表れであると言える。故郷に錦を飾るとの思いを抱かないことが、移住地で生きるための営みの充実につながった。そしてこれが、生活を豊かにすることをめざす農民美術の体現を可能にしたのである。一方本籍地の変更や墓所の設置までに時間を要したことは、移住地に根を下ろすことの困難さを物語るものでもある。しかし、長く生活を営み人との関係を築き得た地を墳墓の地とする考え方こそ開拓の基礎となるものであると言えるのではないだろうか。

次に、酪農業に従事する移住者の特徴として以下の点を挙げたい。酪農業とは、薬として位置づけられていた牛乳を生産する新しい職業であつた。そして当初はアメリカ、後にはデンマークに農法を学び、練乳やバター等の生産は外貨獲得の手段と位置づけられる等、酪農業とは常に海外に目を向ける職業であつたのである。このような特徴を備える酪農業は、自給用の米の生産を追求する人々とは異なる職業観に支えられていたと言えるのではないだろうか。そして毎月牛乳の代金を得ることができる点も稲作との大きな違いであり、現金収入により生活を豊かにすることの魅力を知り得ていたことが副業を受け入れることを可能にしたと思われる。スイスの農民の営みを模した木彫り熊制作の魅力は、酪農業を通し海外に目を向け、現金収入により生活を支える酪農者にこそ感じ得るものであつたのである。

茂木農場は、土地所有者は不在地主であつたが、田下農場で薫陶を受けた精一の影響を受けつつ開拓が進められ、第一次大戦後の不況の中、柴崎玄治郎のリーダーシップの下木彫り熊の制作を心の支えとして酪農業への転換が図られた。そして玄治郎の死後は、酪農の傍ら木彫り熊を制作する柴崎重行の魅力が茂木農場を牽引したのである。土地所有者の

意図に左右されることなく日々の営みを続けた点が、茂木農場の特長であると言えよう。

ここから見えてくるのは、多様な手段により生活の場を築こうとする移住者の姿である。芝居や木彫り熊の制作は、移住者の心を満たし地域の人々とともに生活の充実を図ろうとする営みであった。昼は牛とともに生き、夜は炉辺で木彫りに勤しむ、そんな田園の光景を実現したのが茂木農場である。そして茂木農場が生んだ酪農者は、斗南丘の地において受け継がれているのである。

本研究にあたり、柴崎宏明氏、中里秀男氏、茂木紀久男氏に貴重なお話を伺いました。また八雲町では数度に渡る調査に多くの方々から温かいご支援をいただきました。記してお礼申し上げます。